

エネ会 講演座談会

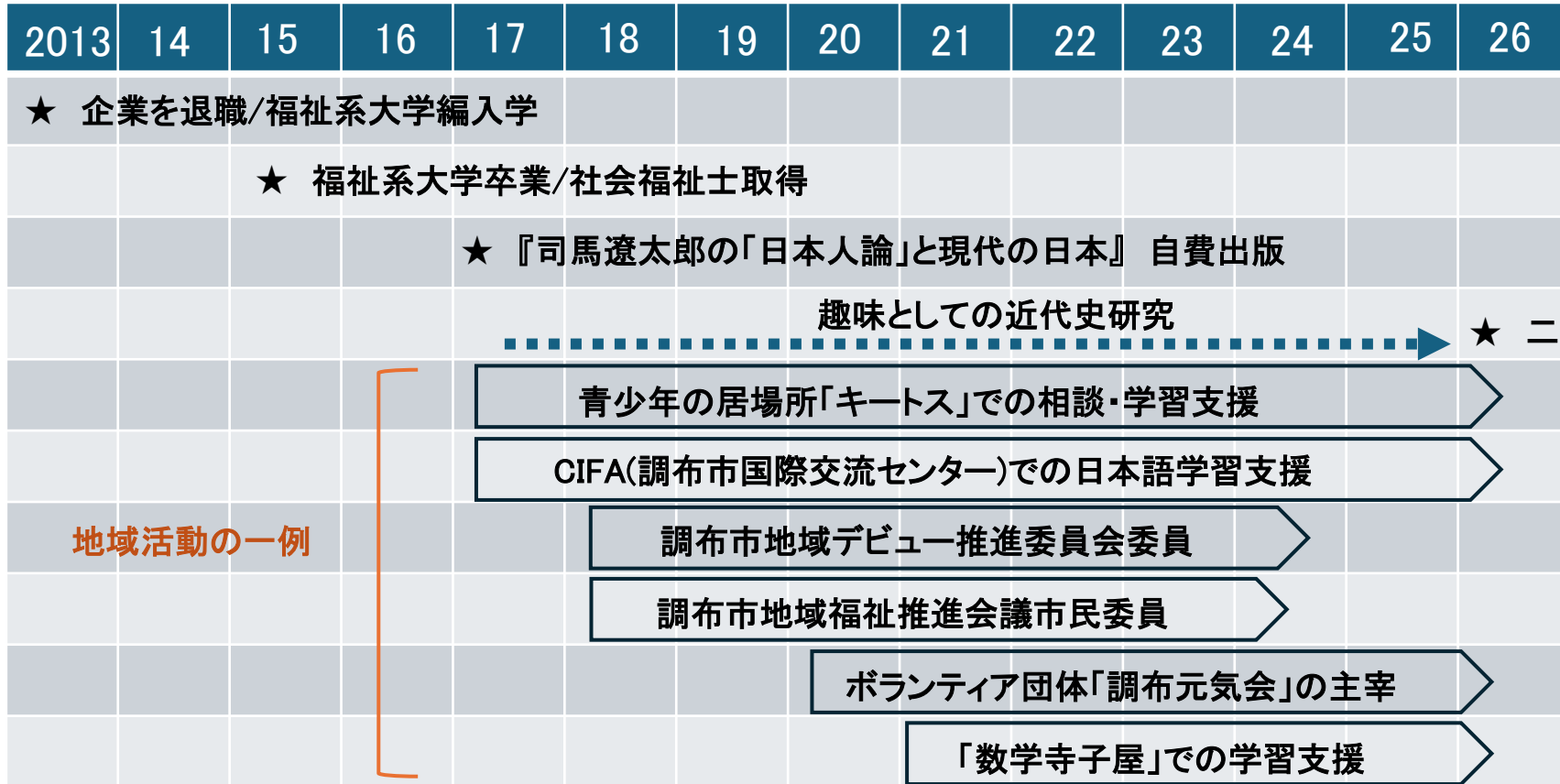
「福沢諭吉と現代文明論」

～政治のリーダーシップについて考える～

向井 卓

令和8年6月8日

企業退職後から現在まで



福沢諭吉と現代文明論
～文明論を完結させるラストピースとは?～



向井 卓

調布市でのボランティア活動



東京新聞の取材@キートス (2018/10/31)



CIFA



数学寺子屋



地域デビュー推進委員会



調布元気会

近代史への関心と執筆の動機

伯父が残した手記が語ったこと(1996年に80歳で逝去、遺品整理で伯母が発見)

「戦歴表」

- 第20師団の野砲兵第26連隊の一員として朝鮮から出兵
- 東西800キロメートルの間を転戦し、行軍の累積距離は、1500キロメートル
- 玉砕寸前で終戦を迎え、奇跡的に帰還(15万人の日本人兵の内、生きて帰還できた1万人の一人)

「ニューギニア体験記」(原稿用紙で二十数枚ほど)

-「檳榔樹(びんろうじゅ)の墓標-ニューギニアの黒い断章」との副題

◇〈過酷な戦い〉

- 兵の多くは戦闘よりも病気、けが、飢えで亡くなる
- 自然条件の厳しさ、病気・飢餓、そして、そこから生じる様々な人間模様など

◇〈パプア人との交流〉

- 終戦間際、ある部落で病気により部隊から離脱も、現地人による手厚い介護で回復、原隊へ復帰
- 部落の人々から「ギリジュウイ」というパプア名で呼ばれ、二か月余り一緒に暮らす



『司馬遼太郎の「日本人論」と現代の日本』【別添】 遥かなるニューギニア 一伯父の闘った太平洋戦争一

「福沢諭吉と現代文明論」

～文明論を完結させるラストピースとは～

目次

序章	6	(3)マルクス主義が説く近代の先	77	6. 世界情勢と新しい近代化理論	130
1. 「文明論之概略」を読む	10	〈唯物論的歴史観と資本主義の分析の世界への波及〉	77	(1)ロシアは冷戦終結で本当に変容したのか	131
(1)執筆の経緯、目的	10	〈マルクスの子言の挫折〉	80	(2)中国の政治的・経済的台頭は続くのか	138
(2)「文明論之概略」の主要な論点	13	(4)アダム・スミスの自由主義とマルクスの社会主義	81	〈中国が経済成長を達成できた理由〉	138
〈緒言及び巻之一 文明の本旨〉	14	〈アダム・スミスの国富論と道徳感情論〉	81	〈経済重視から政治の重視へ〉	141
〈巻之二 一国人民の知徳を論ず〉	18	〈社会民主主義と自由主義経済の共存〉	82	(3)世界は米主導の「一極構造」から多極化に向かうのか	146
〈巻之三 智徳の弁〉	21	4. 民主主義の課題と未来	85	〈アメリカ主導の一極体制の揺らぎ〉	146
〈巻之四 西洋文明の由来〉	22	(1)自由と民主主義	85	〈アメリカの国力低下は地政学リスクの増大へ〉	152
〈巻之五 日本文明の由来〉	25	〈フロムの自由からの逃避-自由が全体主義を生む〉	86	(4)アメリカ社会の再統一は可能か	157
〈巻之六 自国の独立を論ず〉	28	〈構造のない世界における分断〉	88	〈ヨーロッパとは出自の異なるアメリカの民主主義〉	157
【巻之六最終章の論点】	32	〈井上毅の目指した「理」の世界〉	90	〈社会変動の視点から見たアメリカ社会の変化〉	160
2. 福沢の文明論が導いた日本の歩み	38	(2)民主主義のジレンマと政治のリーダーシップ	93	7. 福沢が今を見たら？	171
(1)立憲体制の確立	38	〈戦争と民主主義に対するケナンの指摘〉	95	(1)アメリカの分断と民主主義	171
(2)不平等条約の改正	44	〈健全なナショナリズムと政治のリーダーシップ〉	97	(2)失われた30年とこれからの日本	178
(3)産業立国への挑戦	48	5. 原発事故とパンデミックが映す日本	101	(3)新たな文明論を書くとなれば	184
〈欧米視察を踏まえた政府のリーダーシップ〉	49	(1)3.11原発事故がもたらしたエネルギー問題の混迷と日本人	101	終章	200
〈軽工業の発展〉	53	〈原発事故で起こったことと甚大で長引く被害〉	102	あとがき	207
〈重工業の本格的な発展〉	55	〈原子力は廃止すべきとの世論が高まる〉	103		
(4)昭和の挫折から戦後の復興へ	60	〈事故の原因は国民に正しく理解されたのか〉	104		
3. 近代化と社会学の視点	68	〈政治はナショナリズムに寄り添いながらもリーダーシップが大事〉	108		
(1)文明論としての社会学の誕生	68	(2)新型コロナパンデミックと日本人	109		
(2)プロテスタンティズムと近代化	72	〈新型コロナ感染の第一波 2020年1月から5月〉	110		
〈「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」〉	72	〈「恐怖ウイルス」は二人の首相を退陣へ〉	118		
〈資本主義の精神と近代組織〉	74	〈3年余のコロナ禍の総括〉	122		
		(3)二つの事例の教訓 ～良きナショナリズムに必要なものは～	124		

開化における福沢諭吉の履歴と著作

履歴	主な著作
蘭学塾の開塾(1858) 万永元年遣米使節団 (1860) 遣欧使節団(1862) 幕府使節団として渡米(1867) 蘭学塾→慶應義塾(1868)	「西洋事情」 初編3冊(1866) 「西洋事情」 外編3冊(1868) 「西洋事情」 2編4冊(1870) 「学問のすゝめ」 初編(1872) 「文明論之概略」 (1875) 「学問のすゝめ」 17編(1876) 「明治十年丁丑公論」 (1877) 「民情一新」 (1879) 「帝室論」 (1882) 「瘦我慢の説」 (1891)
西南戦争(1877)	
明治十四年の政変(1881)	
日清戦争(1894)	「福翁自伝」 (1899)



啓蒙家

憂国の士

福沢諭吉の『文明論之概略』(1/2)

卷一: 文明の本旨

卷二: 一国人民の知徳を論ず

卷三: 智徳の弁

卷四: 西洋文明の由来

卷五: 日本文明の由来

卷六: 自国の独立を論ず



日本は、「野蛮」から「文明」至る途中の「半開」の段階

半開(日本)	文明(西洋)
<ul style="list-style-type: none">• 学問の実用化を軽視• 模倣が巧みで現状に甘んじる• 人間交際は習慣が支配	<ul style="list-style-type: none">• 真理の追求に熱心• 創造性や改革を重視• 人間交際は規則を重視

文明とは

『天地間の事物を規則の内に籠絡すれども、その内に在て自ら活動を逞うし、人の気風快発にして旧慣に惑溺せず、身躬からその身を支配して他の恩威に依頼せず、躬から徳を修め躬から智を研ぎ、古を慕わず今を足れりとせず、小安に安んぜずして未来の大成を謀り、進て退かず達して止まらず、学問の道は虚ならずして発明の基を開き、工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用いてその幾分を余し、以て後日の謀を為すものの如し。…』

- 自然現象を科学として捉えその法則を解明する → 近代の科学主義
- 個人の自由と自立 → プロテスタンティズム(カルバン主義)の影響
- 智徳を人々の幸福に活かす → 産業化の進展

福沢諭吉の『文明論之概略』(2/2)

「巻六：自国の独立を論ず」

福沢が英国に在留中の門下生馬場辰猪に与えた手簡

「方今日本にて兵乱既に治りたれどもマインドの騒動は今尚止まず、此後も益持続すべきの勢あり。古来未曾有の此好機会に乘じ、旧習の惑溺を一掃して新しきエレメントを誘導し、民心の改革をいたし度、逆(とて)も今の有様にては外国交際の刺衝に堪不申、法の権も商の権も日に外人に犯され、遂には如何ともすべからざるの場合に可至哉と、学者終身の患は唯この一事のみ。政府の官員愚なるに非ず、又不深切なるに非ず、唯如何ともすべからざるの事情あるなり。其事情とは天下の民心即是なり。民心の改革は政府独りの任にあらず、苟も知見を有する者は其任を分て自ら担当せざるべからず。結局我輩の目的は我邦のナショナルリチを保護するの赤心のみ。云々」



福沢が最も訴えたかったこと

日本のおかれた国際環境

- 産業力の未熟さ(資源国から付加価値を生む国へ)
- 関税自主権の無い不平等条約

政官と知識人の役割

- 人々がこれを認識していないことが大問題
- 知識人の役割が大

最終章の結論

「自国の独立のためには、幅広い視点で考えるべきで、利害得失を判断する場合には、局所を見て軽々に結論を出してはならない。伝統的な君臣の義や先祖の由緒なども一概に排斥すべきではなく、それが目的達成のためになるのであれば、用いてもよい。つまり、内外の別を明らかにして、物事の軽重、緩急を明らかにすれば、色々な人々との会話や議論が成り立ち、そのことが目的に近づく道となり得る。」

福沢のジレンマは、文明論を完結するラストピース？

福沢は、モラル・タイという言葉を用いて、主君と臣下の「君臣の義」、主人と奉公人の「上下の名分」などになぞらえ、それは封建的な概念であるためやや後ろめたさがあるが、国という公のためには活用してもよいという論理だとして用いた。

しかし、150年経った現在の日本や世界を見ると、社会におけるモラル・タイ＝規範意識や公共心という価値観は、個人の自由や自立という価値観と同様に、或いはそれ以上に重要な価値観なのではないか？



時代を超えて、エネ会、SNWの問題意識と通底

伊藤博文による立憲体制の確立

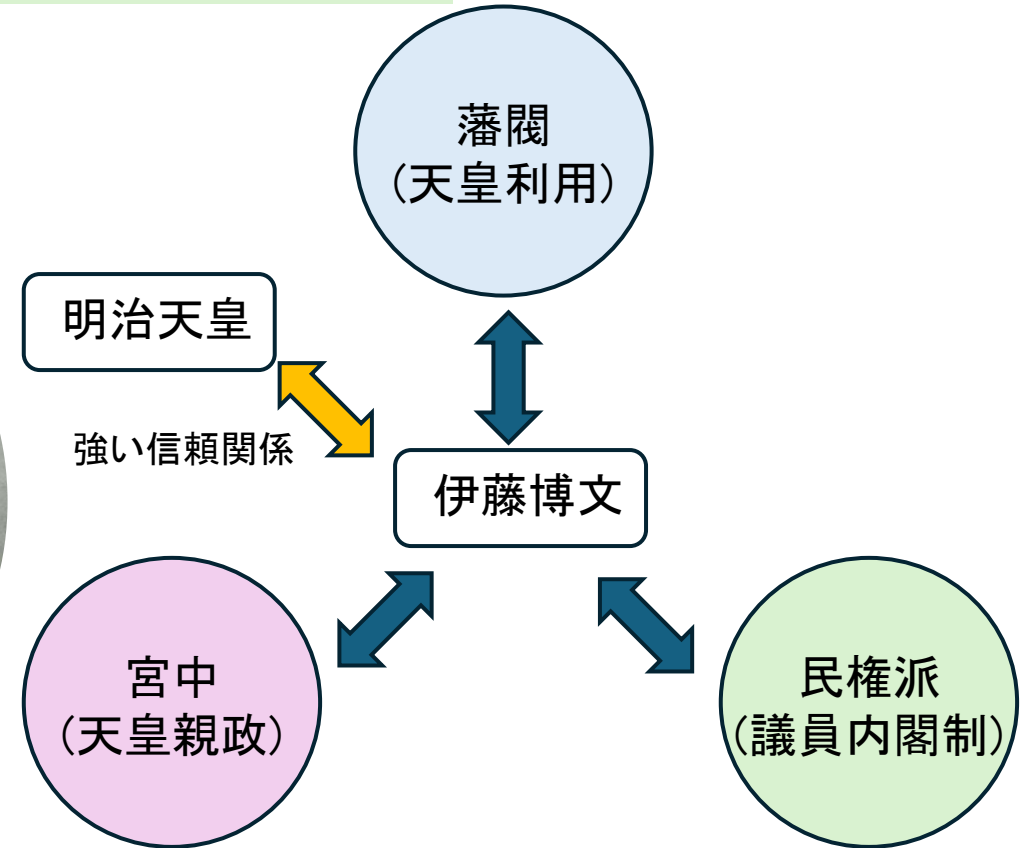
伊藤の歩み

- 「國會開設の勅諭」(1881)
- 憲法調査のために渡欧(1882)
- 初代の内閣総理大臣(1885)
- 最終案を上奏、枢密院の議長としての審議(1888)
- 「大日本帝国憲法」が發布(1889)
- 衆議院議員選挙と国会開設(1890 明治23年)

立憲体制の早期確立とその意義

- 明治維新から20年余という短期間で制定されたアジア初の憲法
- シュタイン教授から「周緻精確」と評価され、不平等条約を早期に改正し、富国強兵を実現するための大きな後ろ盾となった
- 太平洋戦争までの約半世紀に亘り停止されことなく継続し*、伊藤が目ざした**漸進主義**は、原敬の政党内閣の登場(1918)や二大政党制(1924~32)の実現などとして、実を結ぶことになった

* オスマン帝国の憲法(1876)、ワイマール憲法(1919)は短命



合意形成のための巧妙なロジック


坂本一登「伊藤博文と明治国家形成」

保守派(宮中や藩閥) → ドイツ型の模倣ではなく、君権を機軸とし、君主が定め(欽定憲法)、天皇の広範な大権を認める日本モデル

民権派 → 議会を二院制とし、内閣が行政と議会に責任を持つことによって、君権を尊重しつつも、その濫用を防ぎ、最終的には宰相が責任を取るとする本来の立憲主義、英国型でもドイツ型でもない日本モデル

不平等条約の改正交渉

徳川幕府が結んだ通商条約「安政五カ国条約」(1856)は、治外法権、関税自主権無しなどの不平等条約。その後1866年には、輸入品への関税は20%から5%(インフレに連動しない従量税)へ引き下げ、一方、英国は日本からの輸出品には平均10%の関税。

改正交渉	関連する出来事
岩倉使節団(1871～) → 門前払い 寺島宗則(1876～79) 税権回復を悲願に改正交渉開始(1876) 治外法権廃止の世論を受けて引責辞任(1879) 井上馨(1879～87) 改正交渉の開始(1879) 東京での条約改正会議(1886～87) 世論の沸騰を受けて憲法制定まで交渉は中止に(1887) 大隈重信(1887～89) 日米和親通商航海条約の締結に秘密裡に成功(1889) 大隈が暴漢に爆弾を投げられ重傷を負い交渉は中止に(1889) ... 陸奥宗光(1892～94) 第二次伊藤内閣の外相として交渉の再開(1892) 日英通商航海条約に調印(1894) その後国とも調印 (領事裁判権の完全廃止、関税自主権の一部回復) 小村寿太郎による関税自主権の完全回復(1911)	ドイツ汽船の検疫規則を無視した横浜入港(1879) 英国人のアヘン密輸の無罪判決(1879) ノルマントン号事故、英国人船長が無罪判決(1886) 鹿鳴館時代の終焉(1883～1887) 憲法草案の上奏(1888) 英国「タイムズ」による外国人判事の任用を認めた新条約は憲法違反とのすっぱぬき(1889)  日清戦争(1894)

寺島から鮫島駐仏公使への訓令

「(条約の不平等は我国の「一大過失」、関税に期待できず、国家財政も逼迫、国民に重税を課さざるを得ないなか) 民心を安定させ、貿易を盛んにして外国との交際を深めるには、わが税権を回復する以外に道はない。相互対等の原則に基づいて、このことをよく相手国に説明してほしい。」(1878)

犬塚孝明「明治外交官物語」

陸奥の国会演説

「日本外交の目的は、国として受くべき権利は受け、国として尽くすべき義務を全うすることにあります。... (日本がアジアの中で特別な待遇を受けるのだから、) 日本人民も、他のアジアの国にはない特別な進取の気象を示さねばならないのです。したがって、今日の外交の要務は、自尊自重、何人も侮らず、何人をも恐れず、相互に尊敬を尽くして、文明強国の仲間入りすることにあります。... 気宇の大きい外交方針をとることは、忍耐力があり、進取の気象のある人民をもつ国以外ではできないのであります。... (外国人を居留地にとどめおくような議案は維新以来の国是に反するものであり、) ここに政府の外交方針を闡明して、もって、諸君の反省を求めるものであります。」(1893)

岡崎久彦「陸奥宗光とその時代」



産業立国への歩み (1/2)

政府主導の殖産興業

大久保利通のリーダーシップ

産業推進政策

- ・官営工場化
- ・海外からの機械や技術の導入

産業保護政策

- ・外国人による直接投資を原則禁止
- ・政府の外債発行は限定的に

↓
多大な財源を要することになり、一時的には経済的並びに政治的な混乱を招く

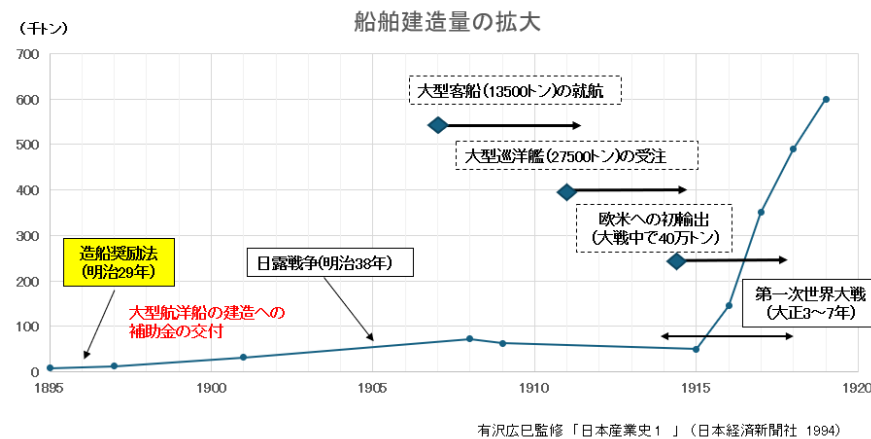
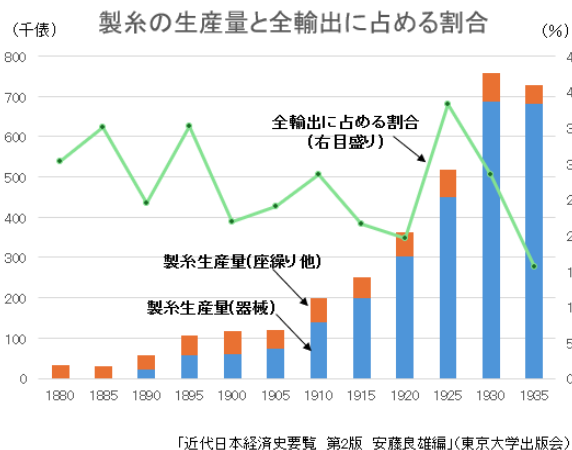
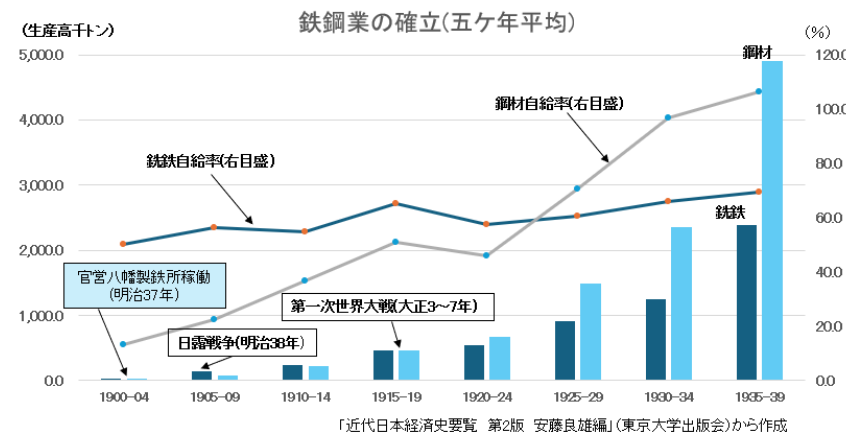
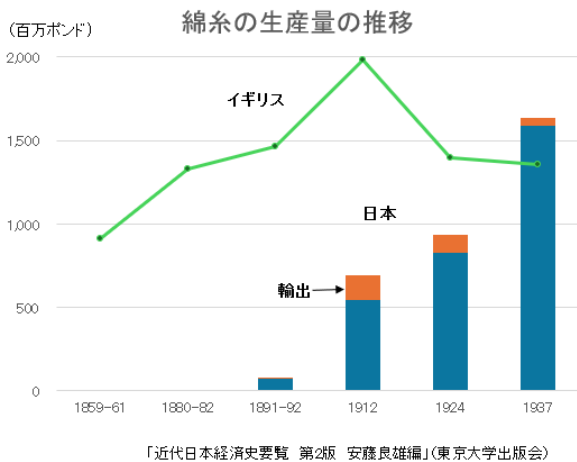
松方デフレ

↓
農民が土地を失い、中小商工業者の倒産も続出、俸禄の支給を大幅に削減された士族たちとともに、近代産業の発展に必要な労働者を生み出すという社会変動の契機になる

軽工業の発展(～明治30年)

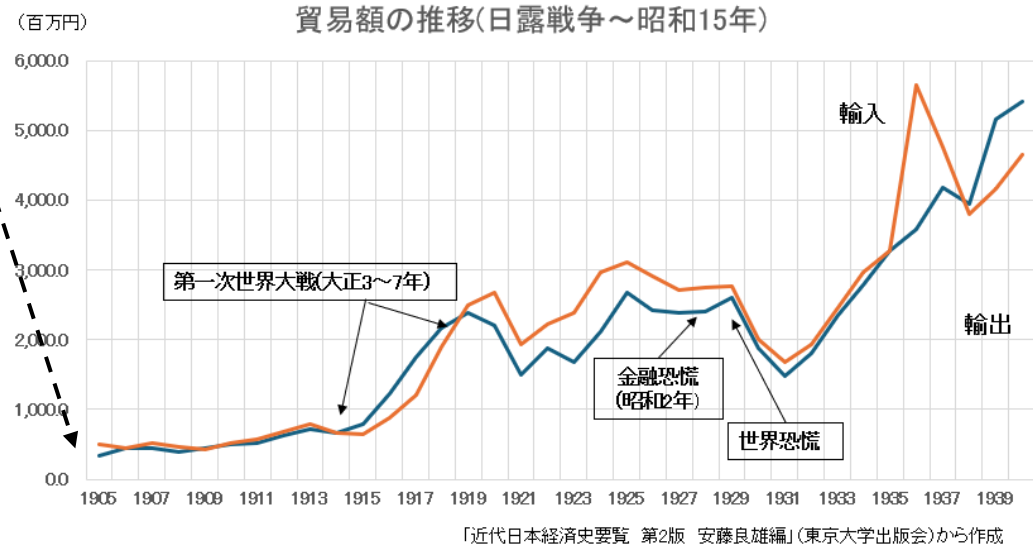
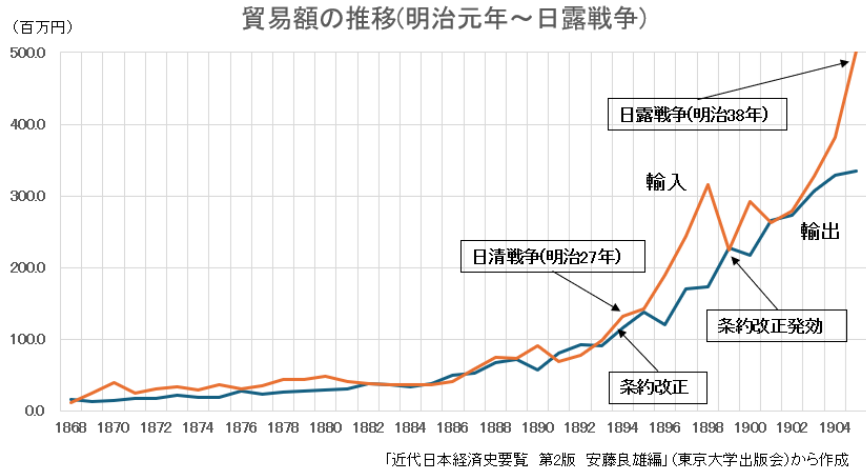
繊維産業を輸出の柱とする目標のもと、官民の努力により明治30年頃には、綿糸や生糸の生産は飛躍的向上しその後の輸出拡大に貢献。一方は、重工業は、日露戦争以降、第一次世界大戦を経て、世界の水準に到達。

重工業の発展(明治30年～)

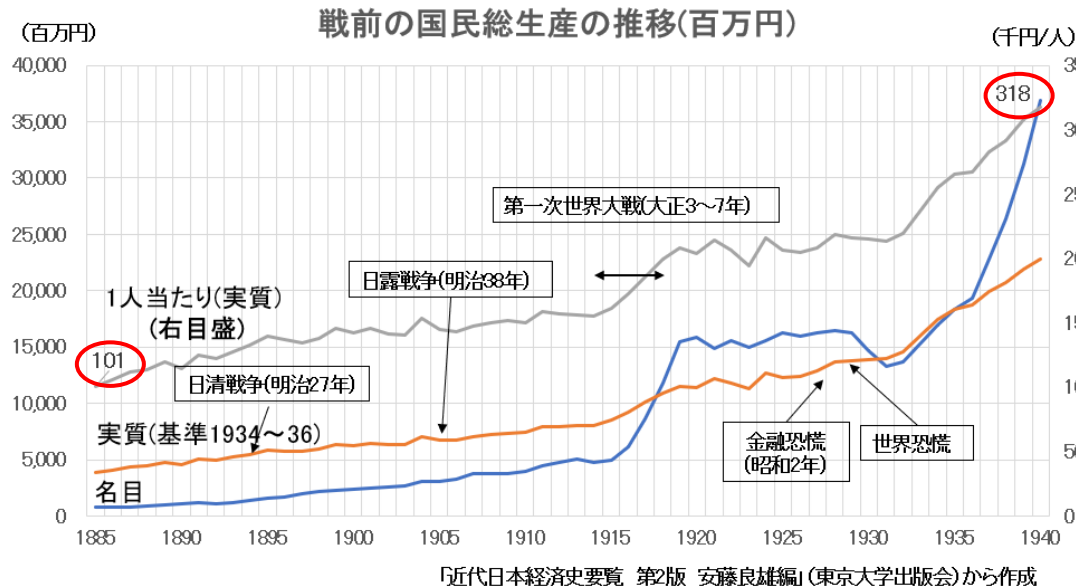


産業立国への歩み (2/2)

貿易額の推移(1868~1940)



GDPの推移(1885~1940)



●貿易額の推移

- 明治元年に3千万円(輸出入平均)であった貿易高は、日露戦争の頃には約4億円まで上昇
- その後、第一次世界大戦が始まり増加は急激になり20億円を超える
- 太平洋戦争開始前には50億円のレベルに

●GDPの推移(明治18年~昭和40年)

- 統計のある明治18年以降、一人当たりのGDPは3.2倍に

大戦への突入と復興(1/3)

二大地殻変動によるナショナリズムの変容

太平洋戦争へ

戦後復興を容易にした明治の精神

中国問題

- 北伐開始(1926)で日本人居留民への暴行、略奪、殺害事件が多発
- 中国に関する国際秩序を定めたワシントン体制(1921~)が形骸化*
- 満州事変(1931)では、世論は軍部を支持



* 北京駐在米公使マクマリーの内部文書

日本は、満州事変までの10年間、ワシントン会議の条文とその精神を守ることにきわめて忠実であったが、アメリカは中国の国際的無責任主義を放置。ソ連の影響力(コミンテルン)を軽視すればソ連が日本にとって代わるだけだと戦後の冷戦を予言。

岡崎久彦「幣原喜重郎とその時代」

世界恐慌

- 世界大恐慌(1929)を契機に日本経済は大打撃
- 国内における格差(都市と農村や所帯の富裕と貧困)が拡大
- 政治への不信からテロや五・一五事件(1932)などを誘発
- 大正デモクラシーで生まれた二大政党制(1924~)は8年間で終焉

政官の誤ったリーダーシップ

- 政党政治(金権)への不信は、立憲体制への不信に
- 天皇機関説・国体明徴声明(1935)による議会での皇国主義の台頭
- 二・二六事件(1936)から日中戦争(1937)、国家総動員体制へ
- 全体主義国(ロシア、ドイツ)の登場で新体制運動も(1940) “バスに乗り遅れるな”
- 太平洋戦争開戦(1941)

近代が問われた大戦

- 太平洋を舞台にした事実上の日米決戦
- 広大な太平洋の海と島嶼という戦域を奪い合う未曾有な戦い
- 長距離を短時間で移動できる航空機の能力が問われる
- 日露戦争の日本海決戦とは異なる長期戦
- 日本は零戦の開発により航空戦で当初はリード
- 最後は両国の工業力、開発能力が試された総力戦



幸運な占領体制 五百旗頭真「日本の近代6」

- 元大使のグルーや、日本への理解が深い多くの知日派米国人の存在
- 日本人に主体性を持たせる一括・間接統治を米国政府に提言(第一次大戦の戦後処理とへの反省)
- その後の朝鮮戦争、長い米ソ冷戦は、米国の判断の正当性を証明

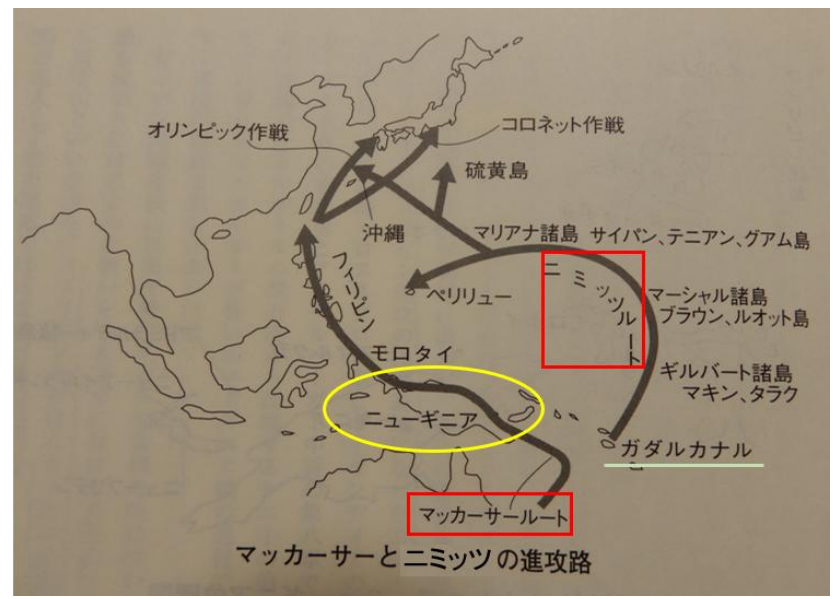
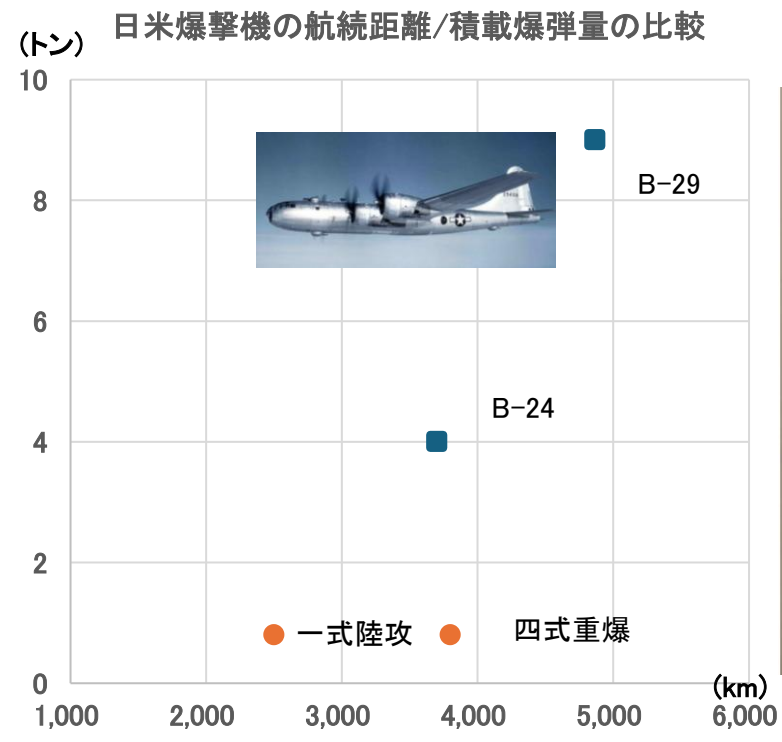
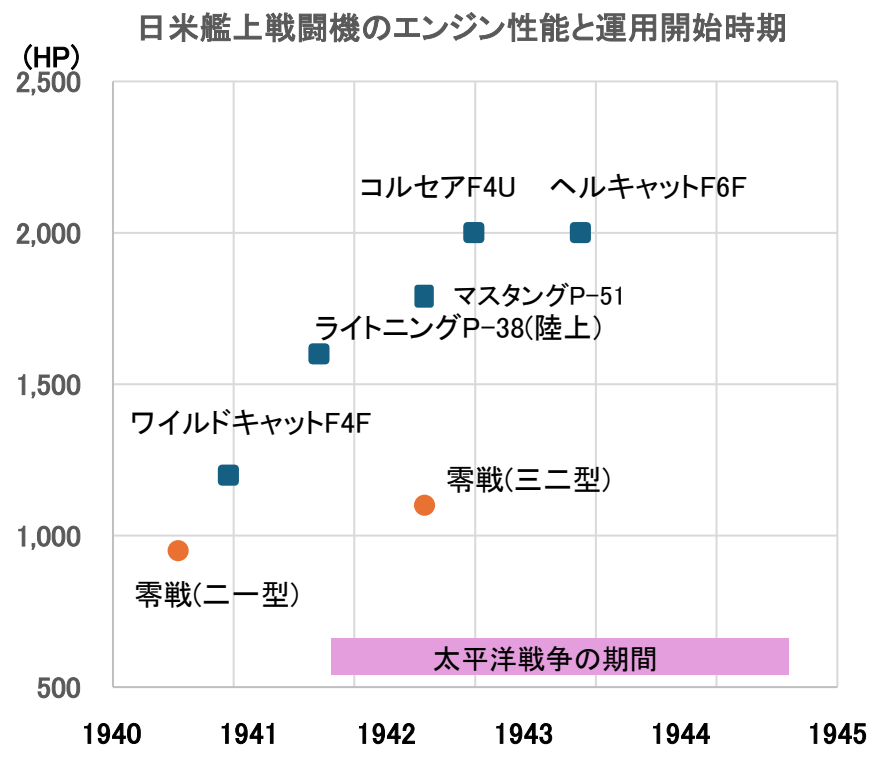
早期の経済復興と国際社会への復帰

- 日本国憲法公布(1946)
- サンフランシスコ平和条約、国際連合加盟(1956)
- 池田内閣所得倍増計画、日米安保条約の改定(1960)、
- 東京オリンピック、東海道新幹線開通(1964)、
- GDP世界2位(1968)、
- 日中共同声明、沖縄の日本復帰(1972)



大戦への突入と復興 (2/3)

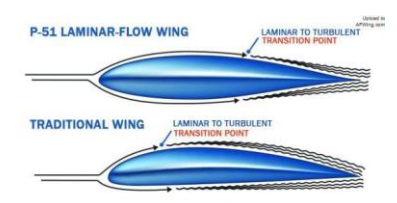
近代が問われた太平洋戦争 ～航空機の開発・製造能力の日米の差



田中宏巳「マッカーサーと戦った日本軍」

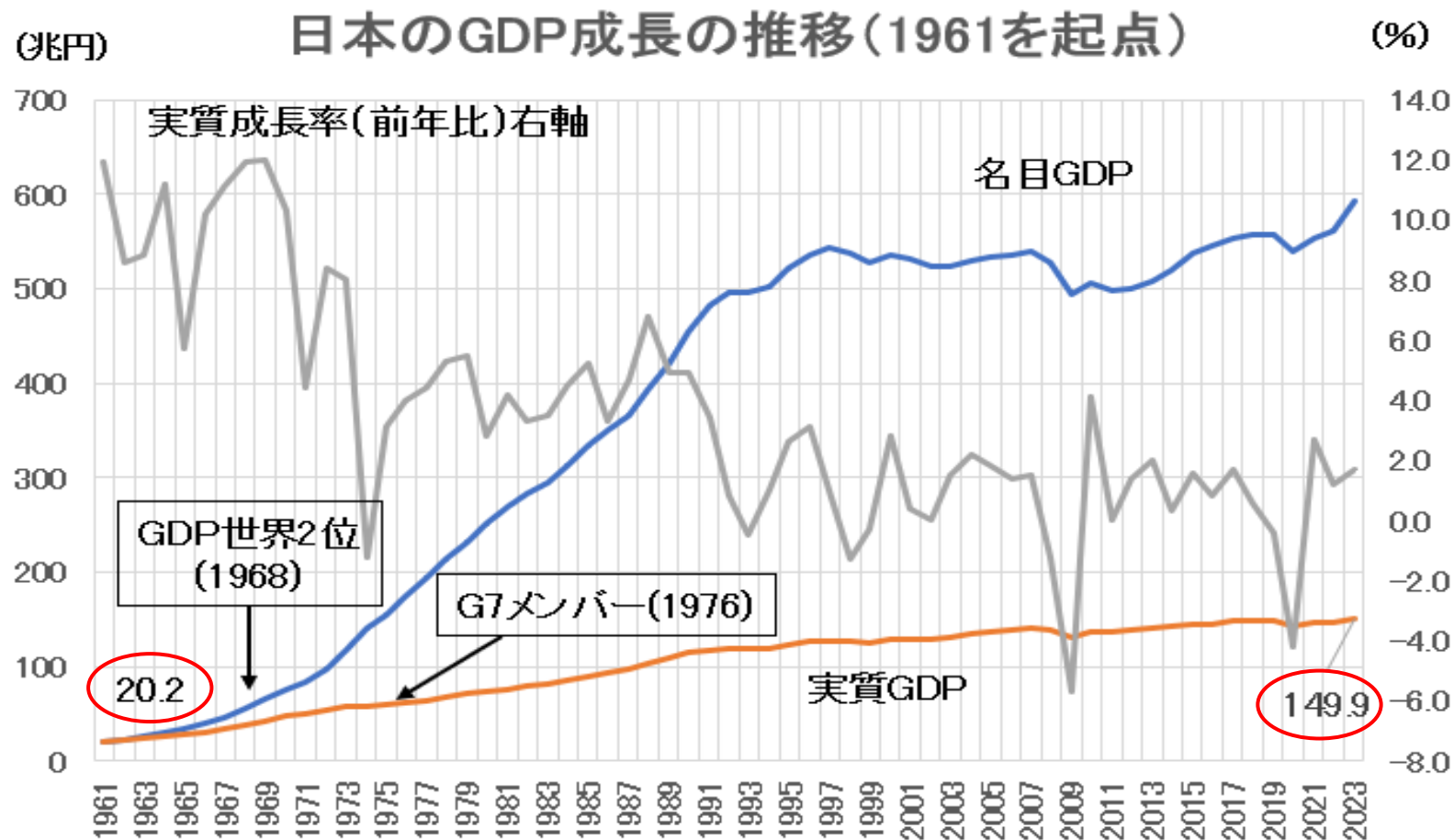


戦前、層流翼の開発に取り組んだ東京帝国大学航空研究所の谷一郎は、戦時中に撃墜されたP-51ムスタングの機体表面の滑らかさを見て、「美しい」表面に羨望を覚えた、戦後回想している。層流翼とは、翼表面の流れを層流に保つように工夫された翼型で、P-51やB-29にも採用されていたが、日本でも零戦の後継機である紫電・紫電改でようやく採用したものの、主翼表面の滑らかさ0.1mm未満の凹凸の要求を日本の工場では実現できていなかったからだ。
水沢光「軍用機の誕生」



大戦への突入と復興 (3/3)

GDPの推移(1961~2023)










- 高度経済成長で、1968年には、西側諸国でアメリカに次ぐ世界第2位に
- バブル崩壊の1990年以降は成長はスローダウンするが、実質では1~2%を維持
- 1961年以降で実質GDPは7倍に増加

文明論としての社会学(1/2)

オーギュスト・コントによる社会学の創設

社会進化の理論

18世紀	19世紀	20世紀
 <p>★アダム・スミス(英)「国富論」(1776)</p>	 <p>★コント(仏)「実証哲学講義」(1830~42)</p>  <p>★マルクス(独)「資本論」(1866)</p>	 <p>★福沢諭吉「文明論之概略」(1875)</p>  <p>★テンニース(独) 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」 (1887)</p>  <p>★デュルケーム(仏)「社会分業論」 (1893)</p>  <p>★ウエーバー(独) 「プロテスタンティズムの倫理 と資本主義の精神」(1904)</p>

コントの「三状態の法則」(人間知識の発展段階)

「神学的」→「形而上学的」→「実証的」

福沢の文明論

「野蛮」→「半開」→「文明」

テンニースの社会変動論

「ゲマインシャフト」→「ゲゼルシャフト」

(家族・地域共同体等の基礎集団)

→(企業、大都市等の機能集団)

デュルケームの社会変動論

「同質社会」→「異質社会」

(村落共同体などの無機的連帯)

→(分業に基づく有機的連帯)

ウエーバーの支配の諸類型

「伝統的支配」→「合法的支配」

(中国の「家産制」と西洋など「封建制」)→(法治社会)

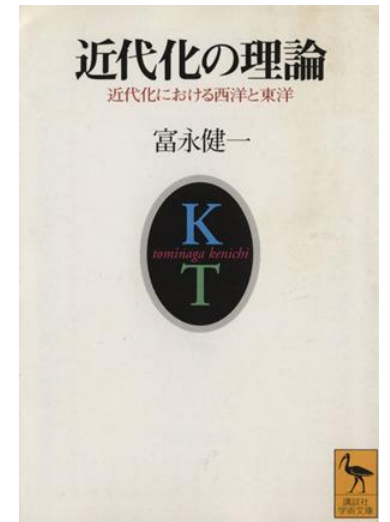
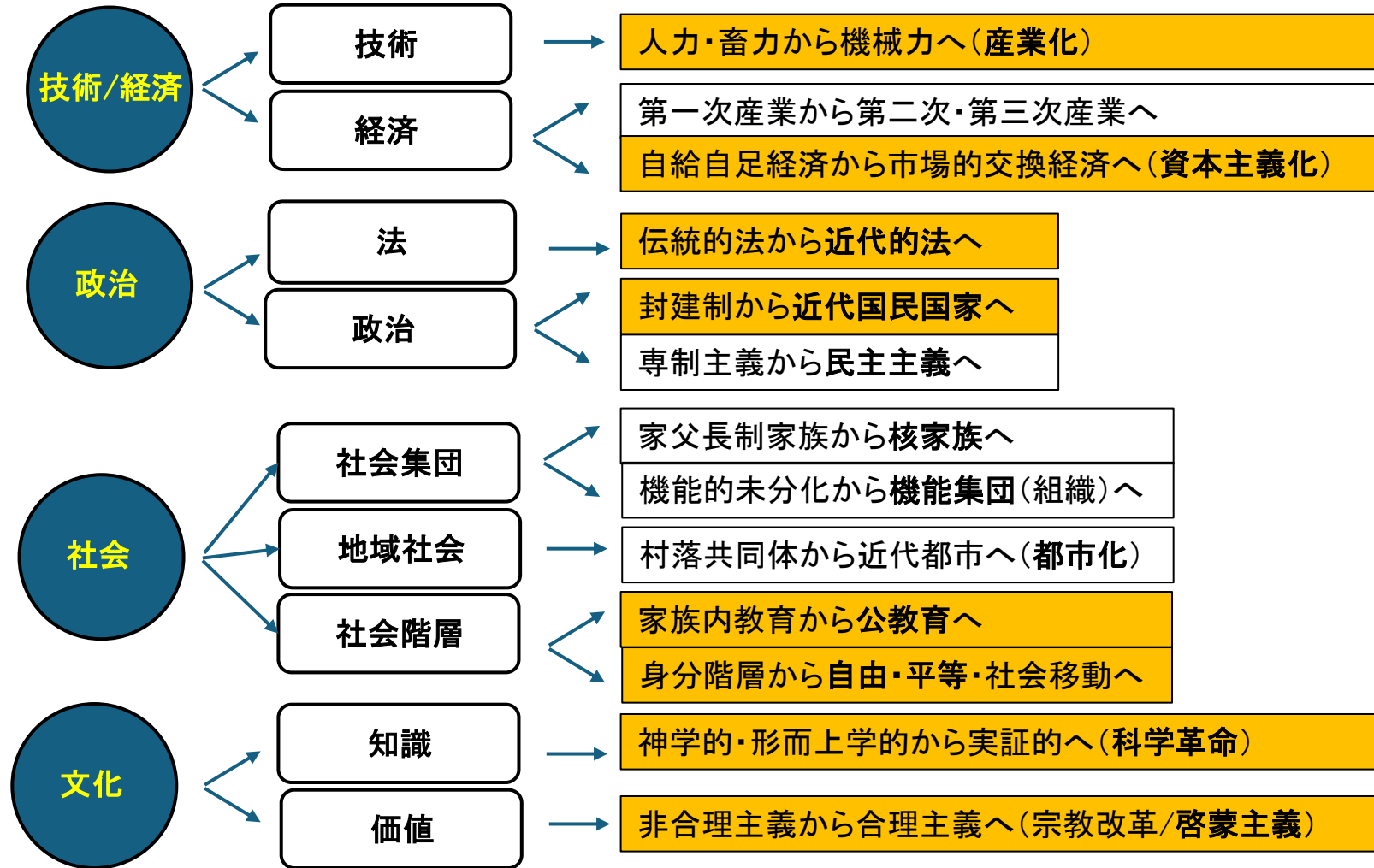
マルクスの人間社会の発展論

「原始共同体」→「奴隷制」→「封建制」→「資本主義」

→「社会主義」

文明論としての社会学 (2/2)

近代化の諸領域 ～伝統的形態から近代的形態へ～





プロテスタンティズムと近代化

「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」

資本主義の精神と近代組織～パクスブリタニカからパクスアメリカーナへ～

ウェーバーが20世紀の初めに観察したドイツの状況

- 営利活動にたずさわる職業に就いた社会層にプロテスタントが多く、一方でカトリックは専門的よりも人文主義的な基礎教育を好み、職業としても手工業の職人やその親方をめざすことが多い

ウェーバーの論点 (立命館大の三笥利幸教授)

- ルターは世俗の「職業」の遂行を道徳的最高善と主張
ルターは、カトリック教会の儀礼や修道士の徳行を重視するこれまでの姿勢を批判し、信者にとってその人の「職業」となる世俗内的義務の遂行だけが、神によるこぼれるように生きる唯一の手段だと考えた
- カルヴァンの予定説と「救済の確証」
ルターの後のプロテスタントの諸派は、「職業」思想における神の「使命」をより重く受け止め、職業労働と生活態度に強い禁欲を求めることになった。特に、カルヴァン派は、神が下す「恐るべき決断」、すなわち、自らが神の救済の対象となっているかどうかを知ることができないという苦しい教義を信徒たちに突きつけていた。
- 「救済の確証」に基づく生活態度
「神の救い」を求めて極限まで追い詰められていた人々は、そうした宿命論を拒否し、自らが「選びそのものによって心を動かされ職務に忠実ならしめられた者」であることを自ら確証することが求められた。信徒たちは、このために、方法的、禁欲的、合理的生活態度を形成していった。すなわち、「救済の確証」は、「人間を非合理的な衝動の力と現世と自然への依存から引き離し、計画的意志の優越に服させ、彼の行為を持続的な自己統御と倫理的意義の考慮のもとにおく」

トクヴィルが見た繁栄するアメリカ (「アメリカのデモクラシー」 (1840))

「アメリカ人は年令・階層・立場の如何を問わず、たえず結社団体 (association) や協会 (society) をつくる。」この時期、アメリカでは有限責任の株式会社が5,000社近く設立され、イギリスやフランスではその数は少なく遠く及ばなかった。

アメリカが近代組織と資本主義の発展で欧州より先行した理由

(佐藤俊樹「近代・組織・資本主義」)

①地政学的な要因

17世紀、イギリスのプロテスタントであるピューリタンが移り住んだニューイングランドの社会は、中央の権威がどこにもなく、多くの小社会に分かれ、これらの小社会はそれぞれ固有の問題を自ら処理せざるを得なかった。そうした社会ではすべての人が独立で、また弱体であったので、何ごとかをなすためにはお互いに自由に援け合わなければならなかった。



②WASP (White Angra Saxon Protestant)の習俗

人間の初等知識(宗教の教義とその証や国の歴史とこれを律する憲法の主な特徴など)を身につけており、その知識や学問を尊ぶ気風を各地に拡げって行った。それはプロテスタンティズムの倫理における職業労働と生活態度を実践する土台であり、「救済の確証」を得る場でもあった。

組織論の日米の違い

- アマチュアスポーツの協会のあり方
- 米英が10カ月でワクチンの迅速な開発と供給を実現させたワープスピード作戦

マルクスの社会主義とアダム・スミスの自由主義(1/2)

マルクスの主張

- アダム・スミスなどの古典派経済学を**自由放任主義**として批判
- 産業化による分業システムが経済の効率を高めることは事実であるが、人々の階級的対立を生むため、**人間による管理・統制**が必要



アダム・スミスの主張

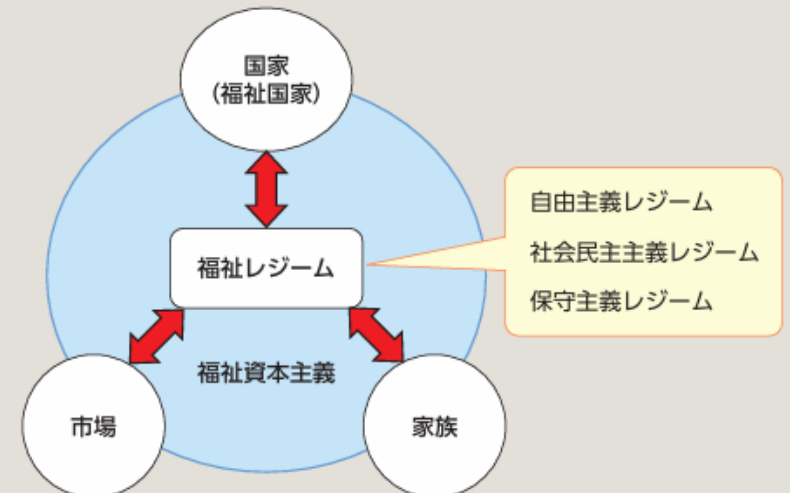
- **分業と見えざる手**による**市場**の存在が裕福でない人々も含めて生活を豊かにする
- 国家が直接的に経済を運営したり、民間の活動に干渉するよりも、**個々人の自由な発想、自由な決定に委ねる**ことの方が、むしろ合理的である
- しかし、一部の意欲的な人々が利益を独占し、労働者を搾取しないように、法を定め、それに従う義務を課すことで、**社会の秩序を維持しようとする**ことが重要



- マルクスもスミスも、いずれも思想の根底に**人間中心主義**があった
- 現代の資本主義体制の国々では、その調和点を見出し、適切な融合を図ろうとしている
- 経済運営のあり方については、スミスが主張したように人々の野心を否定し抑え込むのではなく、むしろ活用すべきで、とりわけ、科学技術の進歩が日進月歩の時代にあっては、一部の政治家や権力者が、中央集権的に社会の経済を設計し運営・管理するのではなく、**全ての人々に創意工夫のチャンスを与える方がトータルとしてはより合理的**とする考え方が基本にある。

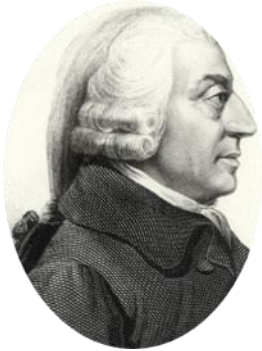
エスピン-アンデルセンによる福祉レジームの分類

- **自由主義レジーム**
市場の役割が大きい福祉レジームで、アメリカなどに見られるモデル
- **社会民主主義レジーム**
国家の役割が大きい福祉レジームで、スウェーデンやデンマークなどの北欧諸国に見られるモデル
- **保守主義レジーム**
家族や職域の役割が大きい福祉レジームで、ドイツやフランスなどの大陸ヨーロッパ諸国に見られるモデル



出所：G・エスピン-アンデルセン『アンデルセン、福祉を語る』（NTT出版、2008年）監修者（京極高宣）解題中の図を一部編集。

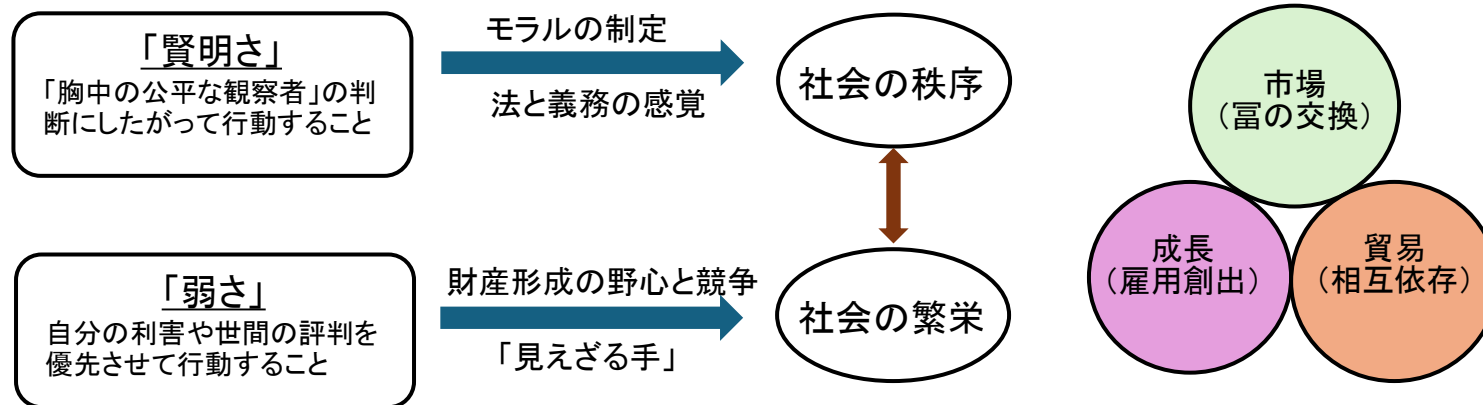
マルクスの社会主義とアダム・スミスの自由主義 (2/2)



アダム・スミスの『道徳感情論』と『国富論』

人間のもつ「賢明さ」と「弱さ」の両面と異なる役割

人と人をつなぐ富の三つの側面



- 「見えざる手」が十分機能するためには「弱さ」を放置せず、「賢明さ」によって制御されなければならない
- 自由で公正な市場経済の構築のためには、社会を構成する諸個人が「胸中の公平な観察者」の声に耳を傾けるのか、つまり、その社会が**道徳的に成熟した社会**であるかにかかっている

出典: 瞠目卓生著「アダム・スミスー『道徳感情論』と『国富論』の世界」(2009)



民主主義の課題と未来(1/2)

封建体制から合議制への移行は近代化の象徴の一つも、理想とする民主主義は、選挙制度や理念などで進化しつつも、様々な課題を抱えている

民主主義の課題についてのいくつかの視点

エーリッヒ・フロム-自由が全体主義を生む (『自由からの逃走』(1941))

- 中世は人々を結びつけている「**第一次的絆**」(家族や氏族、教会や階級など) によって自律的な個人の成長が妨げられていたが、一方で、最もつらい完全な孤独や不安に苛まれることはなかった
- 近代は自由を保障したが、匿名権威、常識や世論など「**二次的絆**」への**新しい依存**を生み出した
- **自動人形**という「**にせの自己**」で判断するため、民主主義も全体主義のリスクを抱えている



森本あんり-構造のない世界における分断 (宗教学者、朝日新聞24/2)

- 最近の米国の分断現象は、既存の権威と人々の間にあった区別のない**構造のない世界**で起きている
- かつては、逆に人間の外側に『正しさ』が存在、人は理性的に生きることができる**構造のあった世界**
- 直観できる正しさの基準がないため、『世界を構造化して自分の立ち位置を知りたい』とする願望
- 人間が共同して作りだした『**ノモス**』に**亀裂**、自然界の調和的な秩序『**コスモス**』への**再接続**が必要?



井上毅-「理」の世界、天子による「仁」の実践 (1844-95元文部大臣)

- 朱子学者井上は、現実の世界(『ノモス』)を超えた世界(『コスモス』)が人々の安寧に寄与する役割を重視
- 近代政治の概念を**意思と利害の多元性の肯定**の上に成立する**作為としての「政治」**だと批判
- 法の目的は、「理性」ないしは「真理」の支配、すなわち、「**仁**」の**実践**でなければならない
- 「真理」を握り、「徳」を体現する**天子による統治**が望ましい (坂井雄吉「井上毅と明治国家」)



下村寅太郎-人性は変わらない (京都学派の学者で科学史家)

- 近代科学の実験的方法が予想している「理性」は、言語や論議で自己を現すような古代の理性—ロゴスの理性と本質的に異なる。
- 中世では世界観の統一があり、近世にはそれが無いというのは、自然学と形而上学の連続性を切断したからであって、宗教、形而上学、科学が醇化されたというポジティブな意味がある
- 「人性」は殆ど古代から変らない、新しき精神の概念の自覚を通してその方法を見出すべきである (『近代の超克』1942)



民主主義のジレンマと政治のリーダーシップ



戦争と民主主義に対するケナンの指摘

アメリカ外交の失敗の二つの側面 (『アメリカ外交50年』1951)

- ①「国際問題に対する法律家的・道徳家的アプローチ」
 - 中国の門戸開放・領土保全という理念 → 日本への無関心
 - ベルサイユ条約の非現実的理想主義 → 第二次大戦への火種
 - 抑止のための軍備の拡充への怠慢 → ロシア共産主義の台頭
- ②「戦争と民主主義の問題への政治家の洞察力が未熟」
 - 民主主義の国だから一旦戦争が始まると狂気の抑制は困難 → 政治の外交におけるリーダーシップ不足

健全なナショナリズムと政治のリーダーシップ

先崎彰容の「ナショナリズムの復権」(2013)の指摘

- 国家に必要な三要件-「力の体系」「利益の体系」「価値の体系」
- 3.11の震災は日本人に「価値の体系」を再考させる契機に
- 日本社会にとっての善/悪を考える健全なナショナリズムの必要性

日本人のアイデンティティと健全なナショナリズム

- ①長い歴史と文化の保存
- ②援け合う精神の継続(縄文時代から)
- ③進取の気性



没自我的な同調意識を制御する政治のリーダーシップが必要 (戦前の教訓)

民主主義の課題と未来 (2/2)



日本人の旺盛な探求心と進歩の精神の一例

遣米使節団の外国奉行支配組頭の発言



一行は、フィラデルフィアに向かう前に立ち寄ったボルチモアでの市長主催の蒸気ポンプの消防演習をバルコニーから見学した。広場中央に設置された電信機から各消防署に連絡することで演習が開始されるが、その様子を次のように伝えている。
「…電信が打たれて二分後、二頭立てに引かれた蒸気ポンプ車が急行して来た。…さらに九分後には、ボルチモア市内の全消防隊が出そろい、蒸気ポンプ車七台と数隊の手鉤・梯子隊が直ちに放水の準備に取りかかった。…七台の蒸気ポンプ車はホースを消火栓に取りつけ、五分もすると、全車一斉に放水を開始した。大雨のような放水に、大勢の見物人たちは水しぶきを避けて四方に散った。」
西洋の消防団の機動力と蒸気ポンプ車の威力に度肝を抜かれた使節団の外国奉行支配組頭成瀬正典は、現地紙の報道によると、スワン市長にその印象を次のように語ったとされる。
「一蒸気ポンプ車の働きにはほとんど感服いたしました。日本にもこのような火消しがあつたら大いに役立つことでしょう。日本の家屋はどれも木造であり、平屋なので、火が出ると壊滅的打撃を受けるのです。」

幕府の官吏は、西欧文明を江戸の民衆の安寧や福利に繋げようとする発想

宮永孝「万延元年の遣米使節団」

兵庫港の英国旗艦を見学する庶民

兵庫開港要求交渉で一定の成果を得た英国公使パークスは、その後、本国のラッセル外相に対し、政治を離れた領域のこととして、公使館員や士官たちが神戸の地について見聞をひろめ、ゆく先々で民衆の好意に接し、軍艦への自由訪問を認めたとして、次のように報告している。
「(これに対して幕府は訪問禁止の触れを出したが、これを撤回させた。) かくして、最後の数日間には、じつに多くの日本人がしばしば家族同伴で来艦し、旗艦プリンセス・ロイヤル号の大きさと装備を目の当たりに見て、好奇心を満足させ、称賛の思いをふかめたのである。」

萩原延壽「岩倉使節団 遠い崖 -アーネスト・サトウ日記抄-3」

岩倉使節団を迎えたイギリスの日本に対する評価

「タイムズ」紙は、日本に対して
「…日本は数世紀にわたって、この地上でもっとも神秘的な地域であった。神秘の念をいっそう掻き立てたのは、日本が野蛮で未開の地ではなく、そこには**組織化された統治機構、発達した産業、尊敬に値する伝統を備えた、非常に歴史の古い民族**が住んでいたからである。
…(日本は、長らく鎖国政策を続け、かつてのイギリスのような封建制度を国の骨格としていたが、) ヨーロッパで文明や社会のルネサンスと呼ばれる現象が、急激な社会的動乱を伴って、日本で発生したもののようである。
…(我々は中国人やインド人にわずかな影響しか及ぼせなかったが、) 外部世界とのわずかな数年の接触だけで、日本人を改革の嵐の中に突入させるのに十分だったのである。」
と評価し、短期間で体制変革に至った理由を次のように推測。
「かれらの鎖国政策が比較的近代のものであることからわかるように、**旺盛な探求心と進歩の精神**は、たえず日本人の心の中に存在したというのが、おそらく真実なのであろう。…」

このような好意的な評価は、幕末の頃から日本とのパイプ役を果たしたアーネスト・サトウやパークスなど英国人関係者とともに、薩摩藩の寺島など留学生たちを通じての情報にも影響を受けていたものと思われる。

萩原延壽「岩倉使節団 遠い崖 -アーネスト・サトウ日記抄-9」



原発事故とパンデミックが映す日本(1/3)

百年かまたはそれ以上の頻度でしか遭遇しない二つの出来事に対して、日本人はどのように感じ、また、政府やメディアどのように対応したのか。自由と民主主義は守れたのか、政府のリーダーシップの発揮は十分であったのか

3.11原発事故がもたらしたエネルギー問題の混迷と日本人

- 四つの災害が複雑に重なった複合災害-地震、津波、原発、風評
(避難者は一時16万人を超え、2022年でも総数3万人)
- ある政治学者の発言(三谷太一「日本の近代とは何であったか」2017)
→ 第三者的、近代の理解に疑問符
「事故は、幕末以来の日本の近代化路線に致命的な挫折をもたらした、原発には、現在および将来の日本の資本主義の全機能が集中していたからで…」

政治のリーダーシップは？

(不十分な事故の原因説明)

- 政府事故調報告(1600ページ)は科学的事実を伝えたが焼け石に水に終わる
 - ・ 地震時に安全上必要な設備は機能を維持したこと(女川原子力へのIAEA視察)
 - ・ 津波によるSBOの発生が原子炉のメルトダウンにつながったこと
- 国会事故調報告は皮相的、かつ大衆迎合的な対応
 - ・ 「原子カムラ」や「規制の虜」との烙印
- いずれの報告も原子力発電に対する根源的な洞察に欠けていた
 - ・ 米国の安全規制はつぎはぎ(patchwork)の歴史 → 日本は地元対策から前言翻せない
 - ・ 日本はPrevention重視 (FTK的な設計・建設(総合調整)は日本の強み)
 - ・ 日本の規制と原子力産業の体制はボトムアップ、米国は逆 → SA対策が後手に

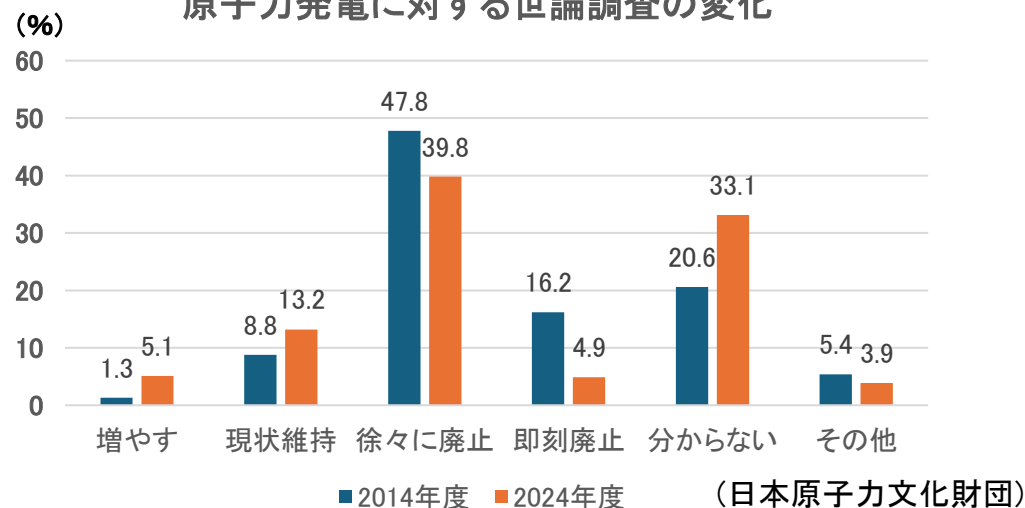
(先を見ないエネルギー政策)

- ・ 浜岡原発の運転停止要請と原発の再稼働非容認
- ・ 拙速なFIT法の導入

メディアは？

- 事実が深刻であったので、騒ぎ立てることもなく、その必要もなかった

原子力発電に対する世論調査の変化



ナショナリズムに向き合う教訓

- ・ プランB(応急対策と恒久対策を仕分けた上で、再稼働可能な原発を選別して運転を継続)もあったが、最終的には、安倍政権も世論の沈静化を待ち、同調意識の風化を待つ道を選ばざるを得なかった
- ・ 10年以上の時間経過で、世論にも変化が見られ、2024年の8月の処理水放出に世論は反対しなかった その意味でプランAは落ち着つつある
- ・ 政治は、正しい政策を実現するために、つねに長期的な戦略に立って、世論に働きかける努力が必要であり、ポピュリズムに迎合して結論を先送りすることではない

原発事故とパンデミックが映す日本 (2/3)

新型コロナパンデミックと日本人

●2020年から始まった新型コロナ禍は第八波の終わる2023/5まで続く

2020												2021											
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
第一波				第二波				第三波				第四波				第五波							
第一回 緊急事態宣言 専門家会議「3つの密」の密 密閉 密集 密接				ジャパニーズミラクル発言(遠藤WHOADV)				安倍首相退陣記者会見				第二回 緊急事態宣言 ワクチン接種開始(医療関係者)				菅首相退陣表明 横浜市長選挙で菅首相の推す候補が敗れる 東京都議会議員選挙で自民党敗北							
								大規模接種センターでのワクチン接種開始 衆参3つの選挙は野党候補が勝利				第三回 緊急事態宣言											

恐怖ウイルスの感染が進む

- 恐怖心をあおるテレビ報道
 - ・ NYの感染爆発は2週間後の東京の未来
 - ・ ワイドショーによる女性/高齢者への刷り込み
- 専門家の行き過ぎたメッセージ
 - ・ 「何の対策もなければ42万人が死亡」
- 恐怖心は差別や偏見、国民の分断を生む
 - ・ 「自粛警察」や医療関係者への差別や偏見
- 恐怖ウイルスは二人の首相を退陣へ
 - ・ アベノマスクの不人気と安倍首相の辞任
 - ・ 菅首相も強いリーダーシップが災いして辞任へ

菅首相のリーダーシップ

- ・ ファイザー社との直接交渉
- ・ 大規模接種センターでのワクチン接種開始
- ・ 世論の反対も国際公約の東京オリパラを断行



世論とのコミュニケーションの課題も

進藤奈那子WHOシニアアドバイザーのメッセージ(NHK)

日本がコロナによる死者率を圧倒的に低く抑えていることを、世界は「**ジャパニーズ・ミラクル**」として高く評価し、その要因を次の様に述べる

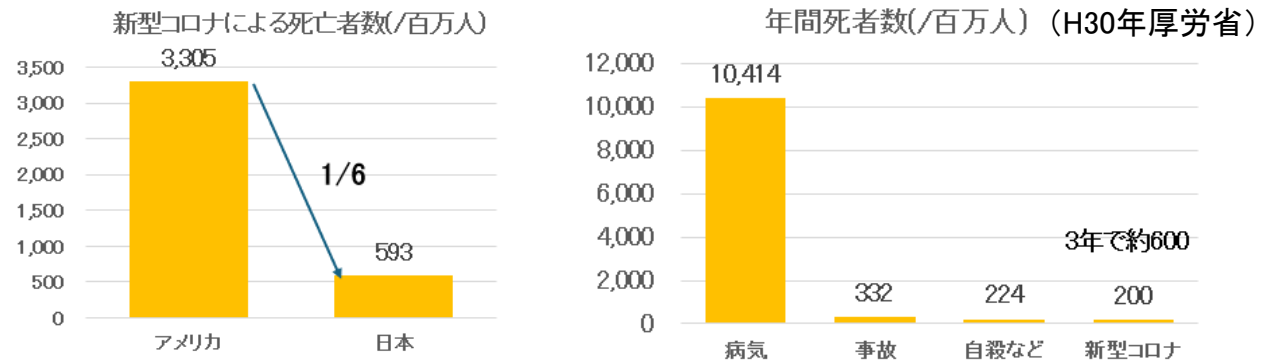
1. 世界的な感染症の専門家が陣頭指揮
クラスター対策を徹底して三密を避けるガイドライン提示
2. 国民の高い衛生意識と感染症に対する理解
多くの国民がそうした行動様式を守ったこと



そして、今後は、国民の自主的な努力が不可欠で、一人一人の冷静な振る舞いと、**それぞれのコミュニティの自発的で創意を凝らした取り組み**が、問題解決のための近道と述べた

民間臨調でこれを「**日本モデル**」と呼んだが、その後、日本人の振舞いはこの言葉通りには行かなかった

3年余のコロナ禍の総括 ～日本モデルは実証された？～



「移動制限は医療体制を守りながらも経済の影響とのバランスをみながら判断」(大竹教授の提言)

原発事故とパンデミックが映す日本(3/3)

二つの事例の教訓

情報公開と自由な議論の必要性(原発事故)

- 1F事故では、水素爆発など衝撃的な画像情報も、メディアによって幾度となく流された。
 - 反原発や脱原発の世論に影響も、止むを得ず
- 権威主義国ではそれは常識ではない、ゴルバチョフの「グラスノスチ」(情報公開、思想・言論の自由化)は、チェルノブイリ原発の事故の情報統制への批判から始まった
 - プーチンになってそれは先祖返り
- 開かれた情報にもとづく自由な議論は一時的にオーバーシュートしても、いずれ底の浅い主張は淘汰され妥当な結論に収束
- 時間やコストを要するが、国民の社会への信頼感を育むためには、不可欠なプロセス
- 日本のエネルギー政策は3.11後に長期の混迷を強いられたが、事故直後の初動(再稼働の判断、調査の総括)が正しかったのか、検証してみることも必要
- EU委員長は「脱原子力は欧州にとって戦略的な誤りだった」と発言(2026/3) 独のメルツ首相も個人的には同意

自由の重要性と民主主義(パンデミック)

- 新型コロナのパンデミックに対して多くの国は、ロックダウンという強制を布いた
- 中国ではゼロコロナ政策のために大規模なロックダウンが行われた
 - 多数の国民は不自由な軟禁生活を甘受
- 「日本モデル」はロックダウンではなく、一人ひとりの自主性を重んじる政策
 - 民主主義が究極的に実践された
- しかし、問題もあった。
 - 二人の首相が辞任を余儀なくされ、
 - 一時は、偏見、差別など分断も進んだ
- 民主主義の浸透度合いは、総選挙の投票率だけでは測れない、
- 内閣支持率が影響力を持つのは政治がそれを無視できないからだが、能動的な対応も必要

政治のリーダーシップの重要性

政治学者の宇野重規は、民主主義のもつ相反する疑問として三つをあげ、国民が「参加を通じての当事者意識」を持ち、それぞれが「判断に伴う責任」を持つことが重要だとの指摘を行っている。(「民主主義とは何か」2020)

制度の観点	理念の観点
多数決の原理	少数派の尊重(平等の原則)
選挙を通じて代表者を選ぶ	選挙だけが民主主義ではない(主体的参加と責任)
国民の意思を政治に適切に反映させる仕組み・制度	平等を実現するための終わりのない過程・理念

政治のリーダーシップを高めることの意味

- 社会主義的な統制社会に求めるのは歴史的に正しくなかった
- 国民の多数が長期的に豊かで安全な生活を送ることを目標
 - 独善と迎合を避ける
 - 政策の優先順位づけ
 - 様々な価値観や少数者の権利を尊重
 - 安易な多数決を避け丁寧な合意形成を図る
 - 国民とのコミュニケーションの努力

マスメディアが一方向ではない双方向での熟議を先導する役割を担うことも重要

世界情勢と新しい近代化理論(1/4)



なぜ新しい近代化理論なのか

フランシス・フクヤマの「世界は自由・民主主義が普遍化していき、政治体制は安定化する」(冷戦末期の「**歴史の終わり**」)との予言は、近代化理論の完成の断言であったはずも、現在の世界はそれを反映していない →今や「**古証文**」なのか？

ロシアは、20年以上も実質的なリーダーとして君臨するプーチンがウクライナへの侵略戦争を始めた。統制的な計画経済の共産主義は捨てたが、政治的な自由を認めない権威主義の国々の一角を占めている



中国は、急速な経済発展で、その経済規模は米国と肩を並べるようになったが、2012年に総書記に就任した習近平は、自由主義的な経済よりも共産党による一党支配を強め、経済、政治、軍事における米中対立の火付け役となっている



アメリカは、中間層の没落に象徴される経済格差の進展や、移民の増加と白人の相対的な減少に伴う多文化主義への移行など、社会の分断・対立が急速に進んでおり、特にトランプ政権では、世界の民主主義国のリーダーとしての地位を放棄して、自国第一主義を邁進中



ロシアは冷戦終結で本当に変容したのか

ロシアの歴史と伝統、日本との違い

(司馬遼太郎の小説「菜の花の沖」など)

	ロシア	日本
国家体制の歴史	<ul style="list-style-type: none"> キエフ公国(9世紀)→モンゴル支配 モスクワ大公国(15世紀) 	<ul style="list-style-type: none"> 律令国家体制(6~7世紀)
近世	<ul style="list-style-type: none"> ピョートル大帝(18世紀)の西欧化政策 重税と農奴制→貴族による上からの近代化 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸中期(18世紀)には農業生産量の拡大により商品経済が発達 識字率の増大など市民社会の成熟 質屋の伝兵衛はロシアでは知識人
近代化	<ul style="list-style-type: none"> ロシア革命で資本主義を経ず(幕末のロシアは日本にとって西欧列強も、岩倉使節団はそうでないことを認識) 	<ul style="list-style-type: none"> 江戸期から明治への長い革命

ロシアの行く末

ハンチントンの「文明の衝突」(1993)

- 世界の八大文明の一つである**東方正教会文明**に属し、西欧文明と一線を画する
- ピョートル大帝以降も**スラブ主義者と西欧化主義者との対立**は続いてきた、
- 「**引き裂かれた国家**」の一つで、ゴルバチョフなどの登場はそ大きな伏流

ジャック・アタリ(2022/5)

- ウクライナ戦争は**冷戦の断末魔**、冷戦のクライマックスの一つ

ウクライナ戦争長期化の背景

- 核を恫喝に使うことでNATOによる直接的な軍事関与を阻止
- 西側の経済制裁は、中国やインド、アフリカなどGSの国々によって十分な効果を発揮できていない
- 石油・ガスを産出する資源国としての強み
- しかし中長期的には産業の発展の遅れや優秀な人材の海外流出などを通じて国力の衰退を招く？



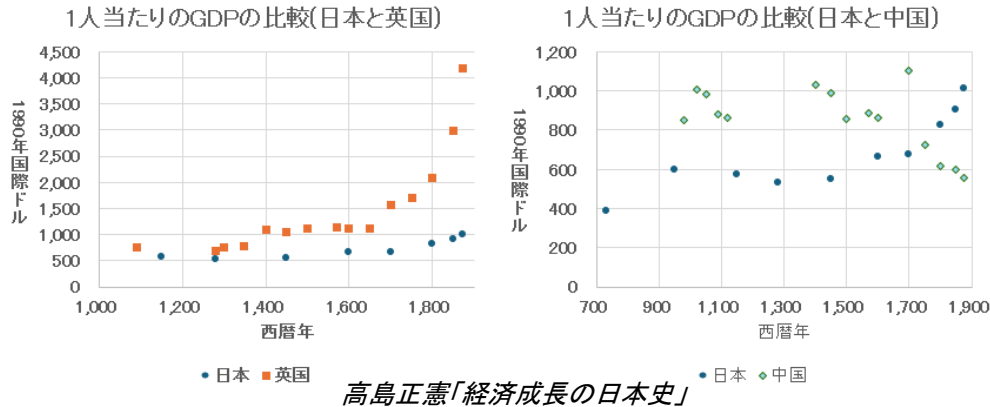
世界情勢と新しい近代化理論(2/4)

中国の政治的・経済的台頭は続くのか

19世紀	アヘン戦争(1840) 日清戦争(1894)
20世紀	辛亥革命(1911) 日中戦争(1937～) 中華人民共和国(1949) 大躍進運動(1958～61) 文化大革命(1966～76) 改革開放政策(1978～)
21世紀	GDP世界第2位(2010) 習近平政権(2012)

中国が西欧近代資本主義に比して欠けていたもの

- ①形式合理的な法とそれに基づく行政と司法の運用
- ②法や行政の業務が官吏の個人的な収入源にならない
- ③プロテスタンティズムのような禁欲倫理
(ウェーバー:佐藤俊樹「社会学の新地平」)



中国が経済成長を達成できた理由

- 元世界銀行の上級副総裁・主任エコノミストの林毅夫(「北京大学中国経済講座」2012)
- 中国は世界経済をリードしていたが、**儒教の古典に依拠する科挙制度**が知識人のインセンティブを抑えたため、西欧における科学革命と産業革命は自発的には発生しなかった
 - 中国は当初、重工業を優先的に発展させようとしたが、他の後進国と同様うまくいかなかった
 - その後、改革開放では、**漸進的な双軌制**(計画による資源配分と市場による資源配分が共存する状態)を採用し、企業の自生能力を高める努力を行った
 - 急激な経済成長は、**比較優位に従う発展戦略**をとってきたからであった
 - 但し、**近代的な市場経済体制への転換が未完成**とも指摘(銀行システムの脆弱性、腐敗の蔓延、国有企業の改革の不十分さなど)

経済重視から政治の重視へ

習近平政権の登場

- 国有企業の保護を強化、市場重視に逆向する経済運営へ
- 個人監視の強化、愛国教育など思想統制を強化、「中華民族の偉大な復興」を掲げる

ピークチャイナ論

- 新型コロナ禍での政策失敗で消費が伸びず、不動産不況が拍車をかける
- 年35兆円にのぼる国防費の投入も、公的年金などの制度は不十分
- 少子高齢化が進むなかで、「ピークチャイナ論」も真実味(李昊・東大准教授)

中国独特の支配体制

- 14億人の巨大国家の統治という観点からは、皇帝支配が伝統的で望ましい(岡本隆司)
- 中国共産党は内部でよく自分の政策を見直していて、生命力が非常に強い(益尾知佐子)

「外婚制共同体家族」とは、「父の権威が強く、相続は均等、子どもは両親と同居し、その子どもの新たな配偶者は常に共同体の外からやってきて、共同体は父の権威の下で横に広がる」家族形態で、共産主義革命が成功したか、共産党が大きな政治勢力をもった国々に見られ、絶対的な一人へ権威の集中が起こりやすい。(エマニュエル・トッド)

益尾知佐子「中国の行動原理」2019

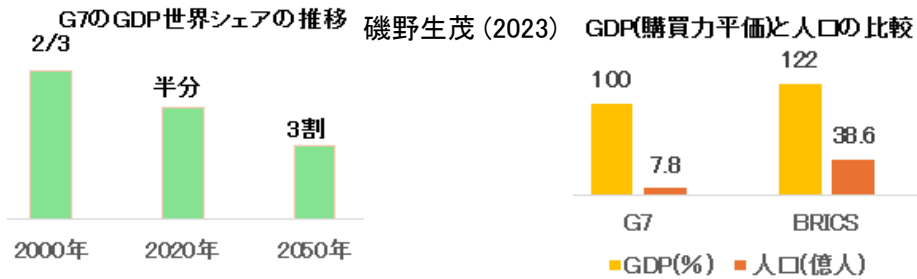
世界情勢と新しい近代化理論(3/4)

世界は米主導の「一極構造」から多極化に向かうのか

文明の衝突としての国際関係 ハンチントンの「文明の衝突」(1993)

- 「一つの世界」(フランシス・フクヤマの「歴史の終わり」)
- 「二つの世界」(西欧VS非西欧、南北、東西、...)
- 「国家が自国の利益のために無秩序に振舞うリアリスト的な世界」など

世界経済におけるアメリカの影響度の低下



習近平の「一帯一路」構想(2013)

- ユーラシア大陸から開始して、中東、アフリカ、LACへと拡大
- 南米で最大、LAC全体では米国に次ぐ第2位の貿易相手国へ

攻撃的現実主義からみた覇権戦争の危機 ミアシャイマーの主張 (2023)

- 長い国境を接するウクライナとロシアの戦争の可能性を当初から予測、
- ウクライナ戦争は米国流の民主主義を押しつけるリベラル覇権主義の結果
- 最大の勝者は中国、米国にとってアジアへの軸足移動が出来なくなったことと、ロシアを中国に追いやったことが理由

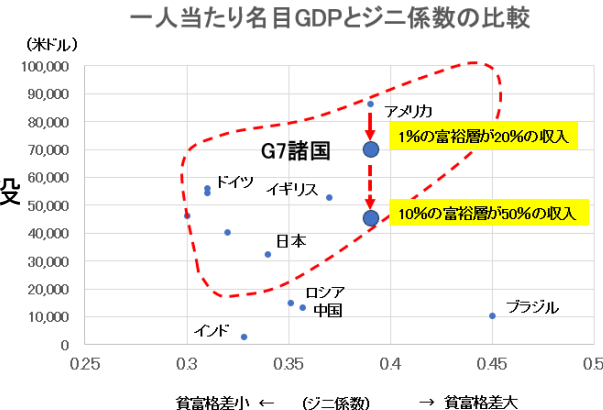
ジョセフ・ナイの「ソフトパワー」論 (2022)

- ロシアと連携する中国の覇権主義への対抗は力(ハードパワー)ではできない
- 国内の分断が克服できなければ技術面の活力が失われ、中国に対抗できない
- また、排外主義や国際秩序の軽視などでも競争力を失う
- 民主的な価値観と人権に関する構想力を持つこと、他国を脅すのではなく魅了することで米国に利益をもたらす→ トランプは真逆のことをしている

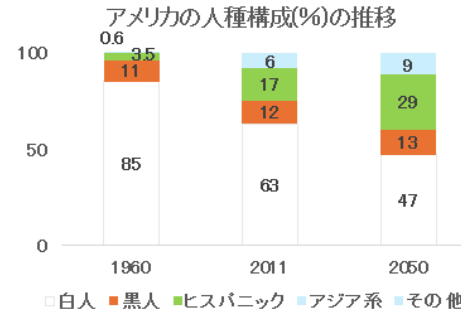


アメリカ社会の分断・対立は深刻

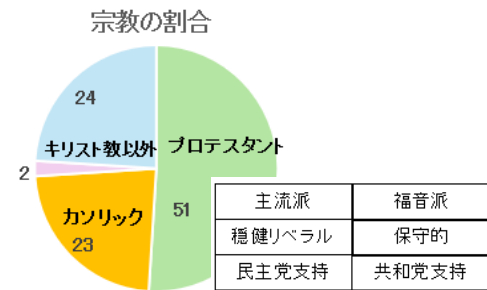
- 貧富の格差の拡大
- レーガノミクスによる富裕層への減税 (新自由主義)
- 規制緩和/産業空洞化による中間層の没



● 建国時のWASPから多民族国家へ



● 宗教とその対立



● 多文化主義は社会の分裂と対立を加速

アメリカの規範崩壊は地政学リスクの増大へ

ハンチントンの二つの文明の断層線(フォルトライン)

- ウクライナ → 戦争の可能性はあるが低い
- 南シナ海/台湾 → 南シナ海はリスク高い

西川佳秀(平和政策研究所24/9)

世界情勢と新しい近代化理論(4/4)

アメリカ社会の再統一は可能か -それを阻む国の成り立ちと社会変動-

国の成り立ち

トクヴィルの見たアメリカ (1830年代)

- 民主制が欧州より進んだ理由
 - ・ 中央の権威がなく、小さな社会が独自に課題を処理
 - ・ 個人は弱く、お互いに助け合いが必要 → 法人・結社
 - ・ 知識や学問を尊ぶ気風 = 習俗 *
- * 後にウエーバーはプロテスタンティズムの「救済の確証」と呼ぶ
- 「多数の暴政」の懸念
 - ・ 普通選挙で成人男性は選挙権をもつ
 - ・ 目先の利益を優先し、少数者や弱者への配慮が軽視
- 欧州の民主制
 - ・ イギリスは議員内閣制であったが、貴族と一部の地主階級のみしか議員になれない
 - ・ しかし、自制心があり、決して一時の衝動に引きずられない

現代における先進国とアメリカの民主主義

- ・ アメリカ以外の国々は普通選挙の実施は遅れたが、一方で基本的人権の理念を取り入れ 分断がないわけではないが、政治のリーダーシップは存在
 - ・ アメリカは基本的人権やDEI (多様性Diversity、公平性Equity、包摂性Inclusion)を重視する勢力と平等より自由を重視する勢力との対立が激化 政治のリーダーシップの不在
- 「人種対立が顕著な米国には「高水準の医療、教育を全国民に利用可能にする必要性」について社会的合意が存在しない」
(竹森俊平24/11)

社会変動

経済のグローバル化の進展(1980年代から90年代以降)

- 金融市場のグローバル化
 - ・ 国境をまたいだ資金フロー量の急速な拡大
 - ・ ヘッジ・ファンドなどプレイヤーの多様化
 - ・ 資金フローの多様化(産油国からの資金移動など)
- グローバル・バリュー・チェーン(GVC)の統括運営
 - ・ 多数の工程を世界各地に最適配置し、ネットワークを統括運営することで、経営効率や利潤を向上させる



- 労働市場の質的変容 (中間層の変容)
- 世界規模での経済格差の増大 (移民の増大)

関税政策

関税政策のいくつかの視点

- 自国経済の第一主義(スティーブン・ミランなど)
- ・ 国内製造業の活性化/政府歳入の増加など
- 国内の格差拡大防止(「リフォーモコン」オレン・キャス)
- ・ 中年の低学歴の白人の間での『絶望死』 (薬物、アルコール、自殺)
- ・ 労働者と家族、コミュニティーを重視する政策



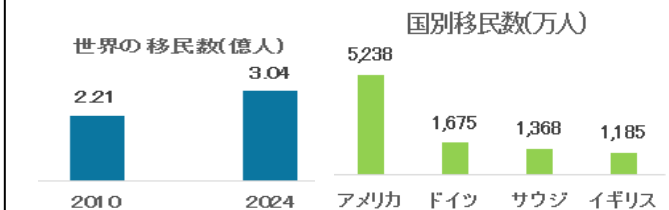
問題点

- 製造業は復権可能か (熟練労働者、エンジニア不足)
- 国民の消費への影響、景気への影響
- 国際秩序や規範の喪失に伴う潜在的なコストの増加
- 地政学リスクの増大

移民政策

世界的な移民の増加とその背景

- ・ 「難民」もあるが、大半は求職や貧困



移民のプラスの側面

- ・ 不法滞在者の雇用はGDPで1.7兆ドルに貢献
- ・ 彼らの納めた税金の3分の1以上は、社会保障など受給資格の無い費用に充当

ハードルは高いが、アメリカのリーダーシップの復活に向けて他の先進国がそれを支援、日本はその旗振り役に！

福沢が今を見たら？ (1/6)

アメリカの分断と民主主義

現代のアメリカ社会はデジャヴ？

- 強欲な社会
 - ・「…果たして不徳の所業多し、あるいは偽詐を以て商売を行う者あり、あるいは人を威して利を貪る者あり、これを**有徳の人民というべからず**」 → トランプのMAGA政策
- 他国への暴虐非道の振舞い
 - ・「触るる所は恰も土地の生力を絶ち、草も木もその成長を遂ること能わず。甚しきはその**人種を殲すに至るものあり。**」
→ トランプのイランへの恫喝「**文明を根絶やしにする**」
- 民主の暴政
 - ・ J・Sミル(「代議政治論」)やトクヴィル(「多数の暴政」)と認識を共有



人種差別と宗教

- ・ 南北戦争以降も市民によるリンチを含む黒人への人種差別は続く
- ・ 公民権法の制定(1965)を経ても白人警察官による黒人への暴力などが差別が継続
- ・ 合衆国憲法は政教分離の原則が謳われているが、レーガンやトランプは大統領になるために福音派と手を結ぶ → **宗教が政治的に利用された**
- ・ 近代文明によって宗教なども本来は醇化されるはず、醇化されないのは、**信者たちを誘導しようとする政治家や宗教指導者の野心**がそうさせる(下村寅太郎)

多民族国家におけるアイデンティティの提唱 (シンガポールのウィ大統領1989)

- ・ **自己より社会を上に**位置づけること
- ・ 社会の基礎をなす単位としての**家族**を支えること
- ・ 主要な問題点は**論争ではなく合意に解決**すること
- ・ **人種や宗教についての寛容さと調和を尊ぶこと**(ハンチントン)



アメリカ国民を統合する理念としての「丘の上の町」

- ・ 建国時のWASPが目指した理念で、**全ての人々の手本となるような理想的で公正な社会**、世界中の目が注がれる町の意味
- ・ ジョセフ・ナイの**ソフトパワー**(映画・音楽・大学・NPO・人権や自由といった価値観-「**その国に惹かれる要素**」)と通底

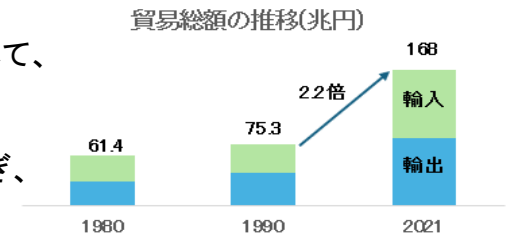
失われた30年とこれからの日本

産業立国の道は失敗だったのか？

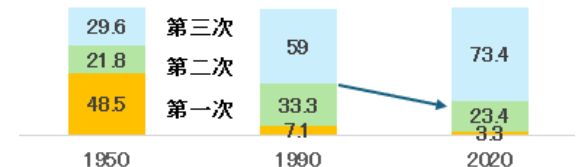
- 自動車産業、
 - ・ 排ガス規制や低燃費で優れた日本の小型車がアメリカ市場で販売を伸ばし、日本の自動車生産台数が世界ナンバー1に(1970年代~1980)
 - ・ トヨタがさらに環境技術で先進的なハイブリッド車を量産化(1990年代後半以降)
- 鉄鋼業
 - ・ 1980年代の初頭には粗鋼の生産量で世界トップに、その後も、高い強度を持つ鋼板や鋼材の開発により、自動車の軽量化など他の産業界の要請に応える
 - ・ 2010年代には中国などの輸出が増えるが、体質改善も進めた結果、現在でも日本の輸出品目の主力に
- 造船業/半導体関連
 - ・ 一時は世界最大シェアも、オイルショックや貿易交渉などの影響で事業の縮小を余儀なくされるが、事業再編や技術の強みを活かして事業を維持

福沢は、政・官・産の貿易立国への努力を多とするのではないか

- 産業界の努力
 - ・ 石油価格の上昇や円高という逆風に対して、環境や省エネの市場ニーズを追い風に
- 政・官のリーダーシップ
 - ・ 日米の貿易摩擦など外交的な決裂を防ぎ、産業界の存続を図る



産業別就業人口割合の変化(%)



これからの課題

- ・ 少子高齢化/社会保障
- ・ 産業政策
- ・ 外国人問題

福沢が今を見たら？ (2/6)

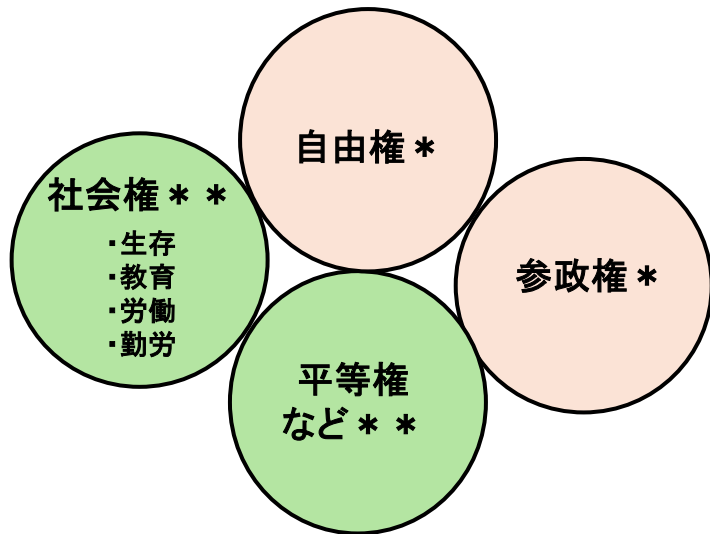
新たな文明論を書くとしたら(1/4)

民主主義は変化し、進歩してきた

制度の変遷

	イギリス	日本
議会制	名誉革命 (1660)	明治憲法 (1890)
政党政治	責任内閣制 (1712)	初の政党内閣 (1918)
普通選挙	1928(21才男女)	1945(1925男子のみ)

日本国憲法での基本的人権の保障



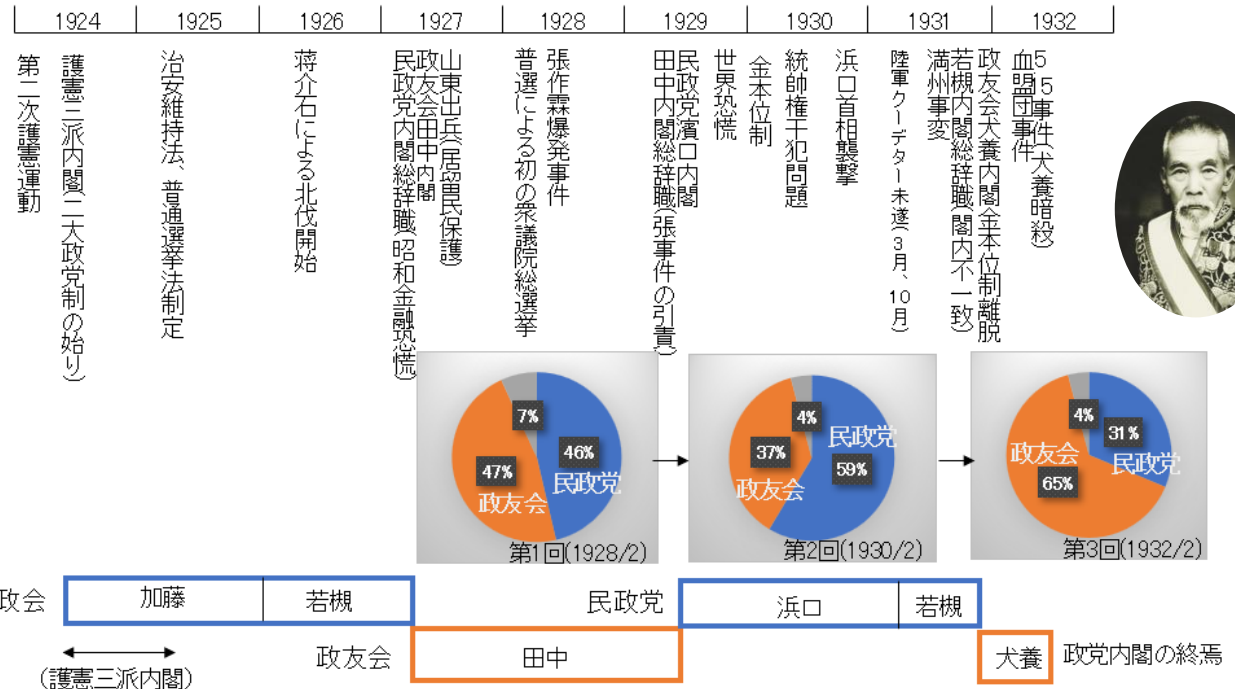
* 明治憲法では一部制約 ** 新たに追加

日本の政党政治の教訓

- 普通選挙(男子のみ)と政党制実現の背景
 - ・ 第一次大戦後の国際関係の緊張緩和と協調の気運
 - ・ 日本の経済発展に伴う都市部の中間層の増加
- 民政党(憲政会)と政友会による二大政党制は四代、八年で終焉
 - ・ 国際的な地殻変動に加え、政党政治(金権政治)への批判
- 原敬は普通選挙と二大政党制に時期尚早として反対
 - ・ 官僚や軍の横やりを排し、政策を政党中心で実行できる政治の定着が先決



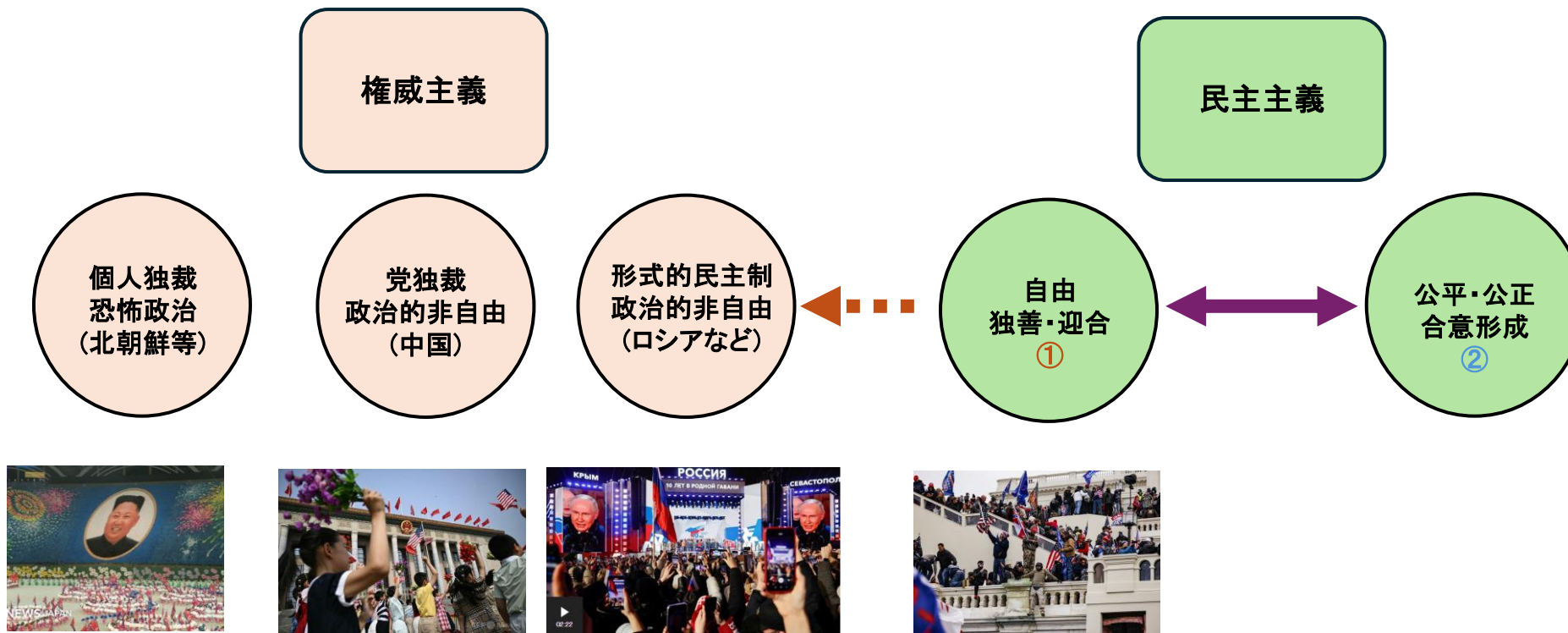
二大政党内閣制の8年間



福沢が今を見たら？ (3/6)

新たな文明論を書くとしたら(2/4)

権威主義と民主主義の類型



民主主義におけるリーダーシップの類型

①独善的で大衆迎合を自身の政治的基盤の強化に利用しようとする。全体主義(権威主義)への傾向を有する。

②自由を尊重するとともに公平・公正の理念を重視し、合意形成の重要性を認識している。弱者救済への配慮を忘れない。

福沢が今を見たら？ (5/6)

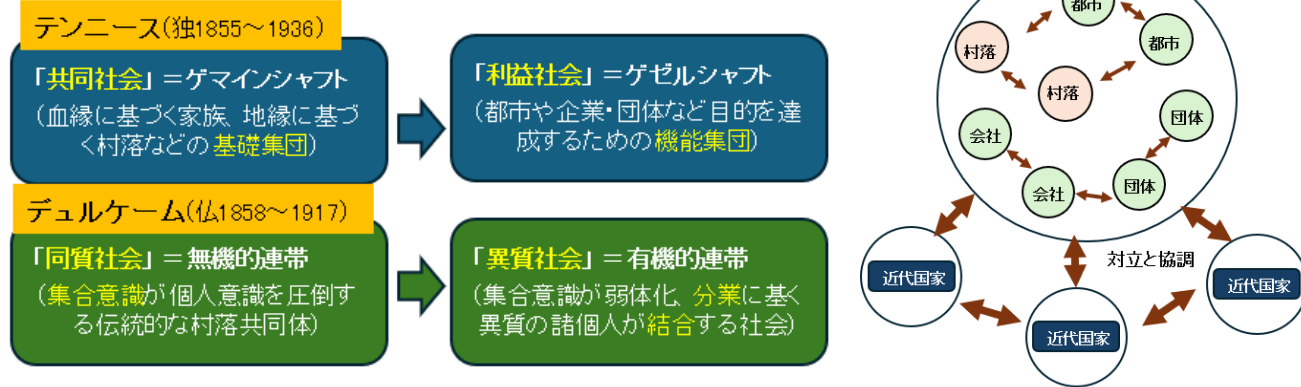
新たな文明論を書くとすれば(3/4)

近代化とモラル・タイは対立・矛盾の関係なのか？

●自由とその抑制

- 社会の機能集団化と分業化は経済合理主義に叶うが、一方で、国家を含めた集団間の利害の対立が激しくなるので、これを緩和・調整する手段が必要

社会構造の変動論



●テンニースの「本質意志」(ゲマインシャフト)と「選択意志」(ゲゼルシャフト)

- ゲマインシャフトにあった無意識的な気分や親切として個人に現れ、他者との一体感や慣習あるいは宗教として社会的に実現される**本質意志**は、なくなったわけではない

●アダムスミスの道徳感情論

- 自由は必要だが、**十分条件として人々の道徳心や成熟した社会が前提**

「モラル・タイ」がなぜ文明論のラストピースなのか

- 福沢は「文明論之概略」の最終章で、「自国の独立のためには、伝統的な君臣の義や先祖の由緒なども一概に排斥すべきではない」と述べた。**消極的な言い回しになった理由**を推察するに

1. 自国の独立のためにはどうしても必要だが、**自国第一**を考えることは他国のことを配慮しない**利己心(偏頗心-ヘンパシン)**であり、文明論の本来のあり方とは異なる。
2. 近代文明は、「個人の自由と自立」によって初めて実現したもので、侍にとっての主君への忠誠、商家における使用人の主人への奉公などは**個人を減するアンチテーゼ**になりうる。
3. 福沢は封建制を否定したが、自身が侍社会の真ん中においてネガティブな側面ばかりが意識されたおかげで、そうした江戸時代における「モラル・タイ」が、庶民の間に広まって、**より広い概念としての道徳心、公共心、規範意識というエートス**を熟成させたことに気づくのが遅れたのかもしれない。

- 「モラル・タイ」は、近代化への対立概念ではなく、**文明を達成させるために不可欠な価値基準**なのではないか。

福沢が今を見たら？ (6/6)

新たな文明論を書くとしたら(4/4)

新たな文明論

- 文明とは智徳を用いて人々の安寧を実現させる進化した社会の状態
- このためには自由と支え合いの精神(モラル・タイ)の両立が不可欠

有権者の健全なナショナリズム

- グローバリゼーションの中での善悪の判断
- 政治を信頼し、リーダーを育てる
- ソーシャルキャピタル(地域における絆の構築)
- 地域という新たな共同社会

* 政治家、官僚、知識人(専門家集団を含む)、メディアなど

政治のリーダーシップ(合意形成)*

- 高い倫理意識
- モラル・タイ=支え合いの精神
- 多数を意識するが少数者へも配慮(公平/公正、ソーシャルインクルージョン)
- 理性と知性を政策判断に活かす
- 歴史や哲学、科学技術などへの理解
- 情報の収集・分析・評価
- グローバリゼーションの視点
- 有権者とのコミュニケーション

■ 福島原発事故、新型コロナ禍における政治のリーダーシップは多くの教訓 同時に「新たな文明論」に照らせば、日本の対応は世界的にはトップレベル

■ 大河ドラマ「豊臣兄弟！」(16)での小一郎の言葉

- 「わしら家族は守られる側ではなく **守る側になったのじゃ一人でも多くのものが助かる道を選ばねばなりません！** 人質などなくてもみんなが笑って生きられる世をいつか作って見せます。わしらはそういう侍にならねばなりません」



さいごに (1/2)

科学技術をめぐる智の責任

巨大IT企業(GAFAM/マグニフィセントセブン)の登場

- 「監視資本主義」(シヨシヤナ・ズホフ)
 - ・ 個人情報「**窃盗**」することで成り立つビジネス
- 「テクノポラ・モーメント」(イアン・ブレマー)
 - ・ 国際社会において、政府と同様に大きな決定力を持つようになった
- 「テクノ封建制」(ヤニス・バルファキス)
 - ・ 人々はSNSを通じて、自分の物語、動画、画像、冗談、そして行動を差し出すことで、巨大IT企業のクラウド資本の蓄積を生み出し、再生産 無意識のうちに**不払い労働**でクラウド資本家を潤す**クラウド農奴**

SNSの普及は新しい井戸端会議を生む

- ジャーナリズムの歴史
 - ・ 新聞や雑誌 → ラジオやテレビ → IT/SNS/AI
- デジタル革命の特徴
 - ・ メディアを経由することなく、リアルタイムに、かつ子どもも含めて多くの人々に情報が届く
- 新しい井戸端会議
 - ・ 現代は、民主主義や権威主義を問わず、意図的な情報に敏感に左右されやすい烏合の衆の集まりと化した側面
 - ・ かつての場所や時間、集まる人々を限定する井戸端会議は、より自由で、多数が参加可能ではあるが、意見が一方向に偏りやすい情報空間に変質

近代文明は地球環境/地球資源の限界を超える？

- 地球環境の破壊
 - ・ 化石燃料の燃焼に伴う二酸化炭素など温暖化
 - ・ 石油を原料とするプラスチックの海洋汚染
- 地球資源は有限
 - ・ 原油の可採埋蔵量は一世紀にも満たず、ベースメタルの銅なども同様な評価
- 人口爆発と食料、公害問題 (長辻象平)
 - ・ 世界人口は、1950年の25億人から80億人と爆発的に増加
 - ・ 「ハーバー・ボッシュ法」による化学肥料(空気の主成分・窒素を原料)の発明は、天然肥料でまかなえる人口の上限40億人を大きく引き上げた
 - ・ 農耕地から湖沼や河川、海域に流れ込んだ窒素化合物は、水質汚染や富栄養化による藻類の異常増殖を招く、また、農地から出る亜酸化窒素は、温暖化ガスで地球環境に影響を与える
 - ・ 人口爆発はエネルギーの消費増加を通じて、環境、資源にも影響を及ぼす



この先、何世紀もこのような経済成長を続けるのは困難、スミスが言う「賢明さ」でこれを克服できる限度を超えている

近代文明をいかに延命させるか、それに人類の英知がかかっている

さいごに (2/2)

『司馬遼太郎の「日本人論」と現代の日本』(2017)

司馬遼太郎は、「日本人は自国の経済だけを考えるのではなく、世界の組合員へ」との遺言を残し、ライシャワーも、「日本人が二十一世紀の全人類が直面するであろう諸問題解決の先導的なリーダーとしての地歩を占めることもありえなくはない」(「ザ・ジャパニーズー日本人」(1979))と予言した。

日本人論のまとめ

武士の登場は、リアリズムの精神に溢れた個の登場であり、日本史における近代という繁栄をもたらすために不可欠なものであった。一方、武士の登場は、善悪や名誉などの新しい倫理観の登場でもあり、日本人はその後、それを公共心という道徳心に高め、社会の秩序維持の源泉にした。「秩序」と「繁栄」の両者をマネージすることは容易ではなかったが、苦勞しながらも、それを乗り越えて来た。社会の進歩と繁栄を促す「自由」とそれを機能させるための「公共心・道徳心」は、これからの時代、益々、重要になると考えられる。その観点から、日本人の“良き”伝統は、21世紀の世界においてグローバルな意義をもちうるのではないか。

司馬遼太郎→福沢諭吉

- 日本の近代史の更なる探求
- 世界の近代化/文明の視点

『福沢諭吉と現代文明論』(2026)

近代社会は多様な人々によって構成され、同時に各々が直接・間接を問わず支えあっている。そして、それぞれ異なる価値観を持ち、多様な生き方を望んでいる。利益を目指し、分業化された社会においては、そうした人々の合意形成、社会としての意思決定が益々重要になる。国際環境の転換期を迎えた現在、モラル・タイ=規範意識や公共心という価値観は、個人の自由や自立という価値観と同様に、或いはそれ以上に重要な価値観であり、政治のリーダーシップとそれを支える健全なナショナリズムが求められている。



福沢諭吉と現代文明論
～文明論を完結させるラストピースとは?～



向井 卓